

大阪市立自然史博物館館報

24

(平成10年度)

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1番23号

大阪市立自然史博物館

平成11年9月30日発行

目 次

大阪の自然 — 地域自然誌展示室への道	岡本素治	1
展 覧 事 業		4
調 査 研 究 事 業		9
資料収集保管事業		17
普 及 教 育 事 業		26
庶 務		34

大阪の自然 — 地域自然誌展示室への道

学芸課長 岡本 素治

大阪市立自然史博物館が長居の地にオープンしてから既に25年が経過した。移転・開館に際して、それまで『博物学』と訳されることが多かった Natural History という語をあえて『自然史』と直訳し、日本ではじめて『自然史博物館』と名乗った。それは、自然界の多様性をあつかう博物学的科学のもっている「歴史科学的側面を意識的に強調し、それらを総合した“自然と人間のかかわりとその歴史の科学”を創ってゆかなければならない（千地，1971、大阪市立自然科学博物館館報5）」との決意の表明であった。その精神が最も強く表現されたのが第1展示室『大阪の自然』の展示ストーリーである。そこでは、冒頭から『都市的自然』『農村の自然』『山村の自然』が対比させられ、そこに営まれる人の活動と自然とのかかわりが、博物館が立地する大都市を出発点として描かれていく。それは大阪平野から丘陵、山地へとつながる地理的広がりに対応するものであるが、同時に人とのかかわりによる自然の変遷を暗示している。そして、人が切り開く前の『原始の大阪』を代表する自然として、照葉樹林のジオラマが示される。

今でこそ『自然史博物館』と名乗る博物館は増え、人と自然のかかわりを追求することの重要性は社会的に認知されるようになってきているが、当時としては時代の一步先を進む展示構想であった。その新鮮な自然観は、博物館界内外の識者から高い評価を受け、市民からも印象深く迎えられたと思う。臆面もなくよく言うな、と思われるかもしれないが、私は展示構想がほぼ固まった時点で当館に就職し、その構想や展示に関する議論に新鮮な驚きを受けた一人なので、このように言う資格を有する、と思う。しかし、その一方で、大阪府下の各地から訪れる人たちからは、自分の住む地域の具体的な自然の解説が欲しい、大阪の自然をたくさんの標本で展示して欲しい、という強い要望が当初からあった。当然といえば当然の要望である。展示を作成するに当たってのモデルは大阪の具体的な自然からとっているにしても、ストーリーは大阪に限られた話ではない。しかもその一般性を重視したために、展示のモデルも匿名で表示されている。当館の展示は、オープンと同時に、『地域自然誌展示室』が欲しい、という課題を背負っていたのである。

昭和60年度に常設展の更新を行った。しかしこの時は、各種の制約があり、また博物館全体の規模は同一のままで更新であったため、当館の常設展がかかえる諸問題を解消するに十分なものとは言い難かった。むしろ、自然史博物館オープン時の展示コンセプトを再確認し、展示ストーリーがよりスムーズに流れるようにする作業が中心となった。『大阪の自然』の冒頭部分に関しては、『農村の自然』『山村の自然』の充実に重点が置かれた。特に、人と自然のかかわりで、最も調和的であり、ノスタルジーをそそる『山村の自然』をジオラマで展示した。明るい雑木林と暗い照葉樹林の対比に満足した。

大阪の自然の標本展示を、という要望には、一部の生物群や化石、岩石等をギャラリーやオリエンテーションホールで展示することで応えるしかなかった。また、特別展示室の一部を区切って常設展に回したために、もともとそれほど広くなかった特別展示室がさらに狭くなるという課題も背負った。さらに、市民や研究者からの寄贈や学芸員の収集により膨大な標本が蓄積され、収蔵庫からあふれんばかりになるという博物館にとって深刻な問題も徐々にあらわになってきた。

このような状況の中で、平成2年の市民ニーズの調査に始まる、自然史博物館の整備構想調査が行われ、平成7年度の「自然史博物館・長居植物園付帯施設整備構想委員会」を経て、自然史博物館の展示更新計画と大阪市建設局との共同事業である『（仮称）花と緑と自然の情報センター』の建設計画が具体化した。

『情報センター』で自然史博物館がめざしているものは、「大阪の自然のすべてが分かる」場の創設である。地下には、大阪の自然の記録を、将来の再検討が可能な形で永久保管する標本収蔵庫が設けられる。1階では、永年の念願であった地域自然誌の展示が繰り広げられる。2階は、企画展等を行う『ネイチャー・ホール』であり、自然史博物館、長居植物園の玄関ホールとして、人を呼び寄せるためのアドバルーンとしての効果が期待されている。

地域自然誌の展示をどのような形で展開するか、ここに自然史博物館がかかわる『情報センター』の中核がある。「大阪の自然のすべてが分かる」場をつくるということは、キャッチフレーズとしてはかっこいいが、そう簡単なことではない。事実、館内でも「すべて」という言葉に対するこだわりがあり、表現を弱めたらどうかという示唆を何度か貰った。しかし、「現在」の知識、情報が常に不完全であることは、自然科学に従事するものにとって当り前のことである。それに、大阪の自然それ自体が常に変化している。だからこそ、多くのナチュラリストが、いつも新しい発見を求めて野山に出かけているのであろう。問題は、その新しい発見、情報がいかに正しく、効率よく集積され、発信されるかである。当館には、大阪の自然に関する最も豊かな物的情報（標本）と人的ネットワークの蓄積がある、という自負はある。

地域自然誌展示室が欲しいという市民からの要望には二つの側面があった。一つは、それぞれの人が住む地域の具体的な自然の解説であり、もう一つは、たくさんの（できれば全ての）種類の標本の展示を、であった。一つの展示室で、各地域の概説的解説と大阪の自然の網羅的展示を同時にやるのは難しいのではないかと、構想委員会でも外部委員から出された意見である。別の外部委員からは、常設展示という形式がはたして本当に効果があるものなのか、それよりは人と人との交流を積極的に促進するような「装置」が重要なのでは、という意見も出された。

このような要望や意見を念頭に、『情報センター』の地域自然誌コーナーを設計した。

展示プラン

大阪府は面積が狭く、地形的にも比較的単純である。三方を山で区切られ、西は大阪湾に面している。丹波山地につながる北摂地域を除けば、山の稜線までが大阪府であると言ってもよいような地形である。大阪湾を囲んで、平野部、丘陵部、山地が円弧状に配列しているとも言える。大阪の自然は、平野－丘陵－山地とつながる地勢的系列が、人の営為とのかかわりによる、都市的自然－農村的自然－山村の自然という系列と深く結びついていることを容易に体感させてくれるよいフィールドだと言えるであろう。とすれば、地域自然誌展示室でも地勢的系列による1本の筋を通すことで、大阪の自然はたいへん理解しやすいものとなるのではないかと。そう考えて、地域ごとの特性は、主に山地で扱い、平野部－丘陵部－山地を対比させて、自然と人のかかわりを示すことにした。

山地については、北摂山地、金剛・生駒山地、和泉山地それぞれにいくつかの代表的な山を取りあげ、現実の山の並びにしたがって配列し、壁面上部に掲げる山並の写真の下に自然観察地図とともに特徴解説をする。平野部と丘陵部は、大阪を区域に分けるのではなく、林、草地、耕作地、水系、などの構成要素に分け、それらを観察できる典型的なコースの自然観察地図とともに展示する。淀川は平野を流れるが別格の扱いを受けて大阪湾に注ぐ。このような配置により、展示室全体が大阪をイメージさせるものとなるよう努めた。そして、自然観察地図によって、観覧者の関心が展示を見ることで完結するのではなく、実際に野外に出て大阪の自然に触れてもらうことを願う展示室とした。

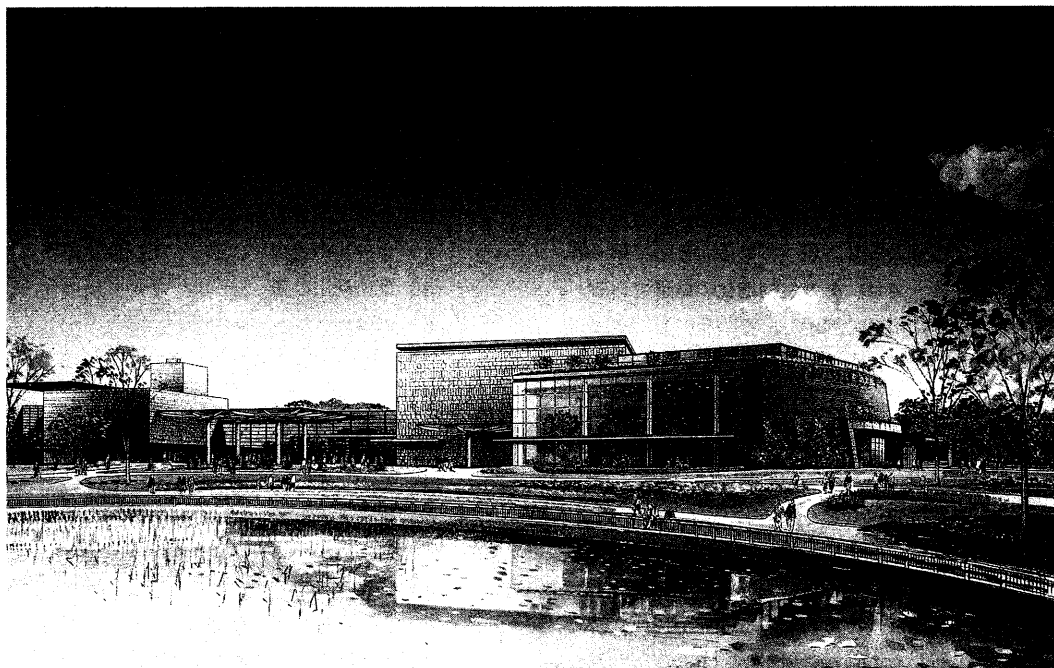
すべての種類を展示することにはさまざまな制約がある。たとえば、植物標本には耐久性やスペースの問題があり、主体は画像情報を活用したデータベースにならざるをえないであろう。しかし、可能なものについては、できる限り多くの標本を出したいと考えている。展示場所は地域自然誌展示コーナーにも学習コーナーにも隣接するスペースである。学習コーナーには、図鑑類や検索端末

があり、観覧者は自分で名前を調べて実物と照合することもできるし、そこに輪番で常駐する学芸員に相談することもできる。

人と人との交流が重要であることは、私たちも強く感じているところである。長居にオープンして以来、学芸員が輪番で普及センターに詰め、展示を見て、あるいは自然観察を通じての、市民の疑問や相談に応じてきた。『情報センター』ではそのカウンターを、さらに広く充実させ、積極的に市民との対話を図る。

大阪の自然の最新の情報を集積するためには、私たち自身の収集活動もさることながら、各地域を丹念に調べておられる自然同好者たちの協力を得ることが欠かせない。当館にそのような人的ネットワークの蓄積があることは既に述べたが、『情報センター』に期待されるのは、その輪をさらに広げていく効果である。大阪各地の自然観察団体に情報発信の場を提供することで、自然や環境の問題に関心を持ち、同じ関心を持つ人々と語り合うことを求めている人を同好の輪に加えてくことができるであろう。

『情報センター』の開設により、当館のかかえてきた問題点のかなりの部分が解消される。しかし、単にそれだけにはとどまらない。ある意味で、当館に新しい顔が付け加わることになる。『情報センター』は当館の西に接して位置し、当館と植物園の共通の玄関ホールとなる。これまでは、植物園の中に位置し、外からは見えにくいということが私たちの悩みであった。『情報センター』がオープンすると、私たちのカウンターは直接市民の目に触れることになる。好むと好まざるとにかかわらず、当館の事業は拡大し、より広い（またたぶんには異なったタイプの）市民層とのかかわりが生じて来ることは明白である。私たちは、この新しいネットワークの要として、うまくやっていけるだろうか。また、これまで私たちの活動に共感し支援してきて下さった多くの市民に、変わりなく支持されることができようか。いま私たちは、期待と不安をともに抱きながら準備作業を進めている。



花と緑と自然の情報センター（仮称） 外観イメージ図

展 覧 事 業

自然史博物館の展示は、常設展示を主体とし、特別展示、特別陳列が、これを補っている。

常設展示は「自然と人間」を基本テーマとし、具体的で身近な自然現象から出発し、分野的、地理的に、そして歴史的にも視野を広げることによって、人と自然とのかかわりをも含めた自然界の法則性に至ろうとする考えのもとで展開されている。したがって、館の展示全体が、一つのストーリーによって、組み立てられている。

特別展は、地元大阪とその周辺地域の自然誌を紹介したり、学芸員の研究成果を広く市民に還元するという趣旨で、年1回開催している。そのテーマについては、少なくとも数年先までの計画を立てている。特別陳列は、特別展と同様な趣旨で行なっているが、より小規模なもの、あるいはテーマを絞ったものであり、また市民からの寄贈品・コレクションの紹介も含めて、随時実施している。

館外においては、市立図書館などの依頼に応じて、小規模な移動展示を行なっている。

I. 常設展

入口のオリエンテーション・ホールでは、基本テーマに基づき、自然史博物館の展示のねらい、すなわち、私たち人間が、どのように自然とかわかってきたのか、そしてこれから、どう自然とつきあっていけばよいのか、ということ、を、象徴的に展示している。

第1展示室「大阪の自然」と第2展示室「地球と生命の歴史」では、身近な大阪の自然から出発して、その歴史を地球の誕生まで遡り、第3展示室「生物の進化」では、その地球上のさまざまな環境において、生物は、他の生物と関わりを持ちながら、常に進化し分布を広げようとしてきたし、今もそうであることを、述べている。そして第4展示室「自然のめぐみ」では、その生物進化の結果である、豊かな自然のめぐみについて展示し、その自然を、未来にも残さねばならないことを訴えて、締めくくりとしている。

2階ギャラリー（一部は1階のオリエンテーション・ホール）では、展示室の中で十分に紹介しきれなかった、大阪の自然に関する資料の、分類展示を行っている。

II. 特別展

第25回特別展「都市の自然」

もともとあった自然環境を、人間がほぼ完全に作り替えることによって、新しくできた環境が都市である。もともとすんでいた生き物の大部分は姿を消している一方で、都

市がつくられることによって数を増やす生き物もいる。都会にはあまり生き物がいけないという言葉をよく耳にするが、都市には意外と多くの生き物が暮らしている。そういった身近でありながら、意外と知られていない都市にすむ生き物を紹介したいと考えた。

当館では、今まで地元大阪を中心に、植物、昆虫、鳥など都市に生きるさまざまな生き物について、調査研究と資料収集を続けてきた。特別展「都市の自然」では、こういった資料を中心に、都市に生きる生き物を紹介した。

展示では、まず都市環境の非生物的・生物学的な特性を紹介した上で、人家、埋立地、街路、都市公園などに生息する生き物とその暮らしを紹介した。また都市環境に生息する生き物を考える上で、欠くことができない移入種についても紹介した。最後には、地元長居公園を例にとりながら、都市環境のあり方について考える展示も行なった。

●会 期 平成10年8月1日（土）～10月11日（日）

●会 場 大阪市立自然史博物館 特別展示室

●観覧料 大人500円 高校生・大学生400円

中学生以下無料 団体割引率は通常通り

●展示内容

(1) ミニジオラマ

- 1) 家の中（図2、図3）
- 2) 埋立地
- 3) ビル街（図4）
- 4) 都市公園（図5）

(2) テーマ別展示

- 1) 街路樹
- 2) 町のチョウ
- 3) 市内で繁殖する鳥、鳥の巣
- 4) プールの昆虫
- 5) 都市河川の魚
- 6) 岸壁のフジツボ
- 7) ダンゴムシとワラジムシ
- 8) クマゼミ
- 9) 窓ガラスに衝突する鳥
- 10) クマバチ

(3) 解 説

- 1) 都市環境の特性
- 2) 帰化生物
- 3) 長居の生物相の変遷
- 4) 都市における生物との共生
- 5) 調べてみよう身のまわりの自然

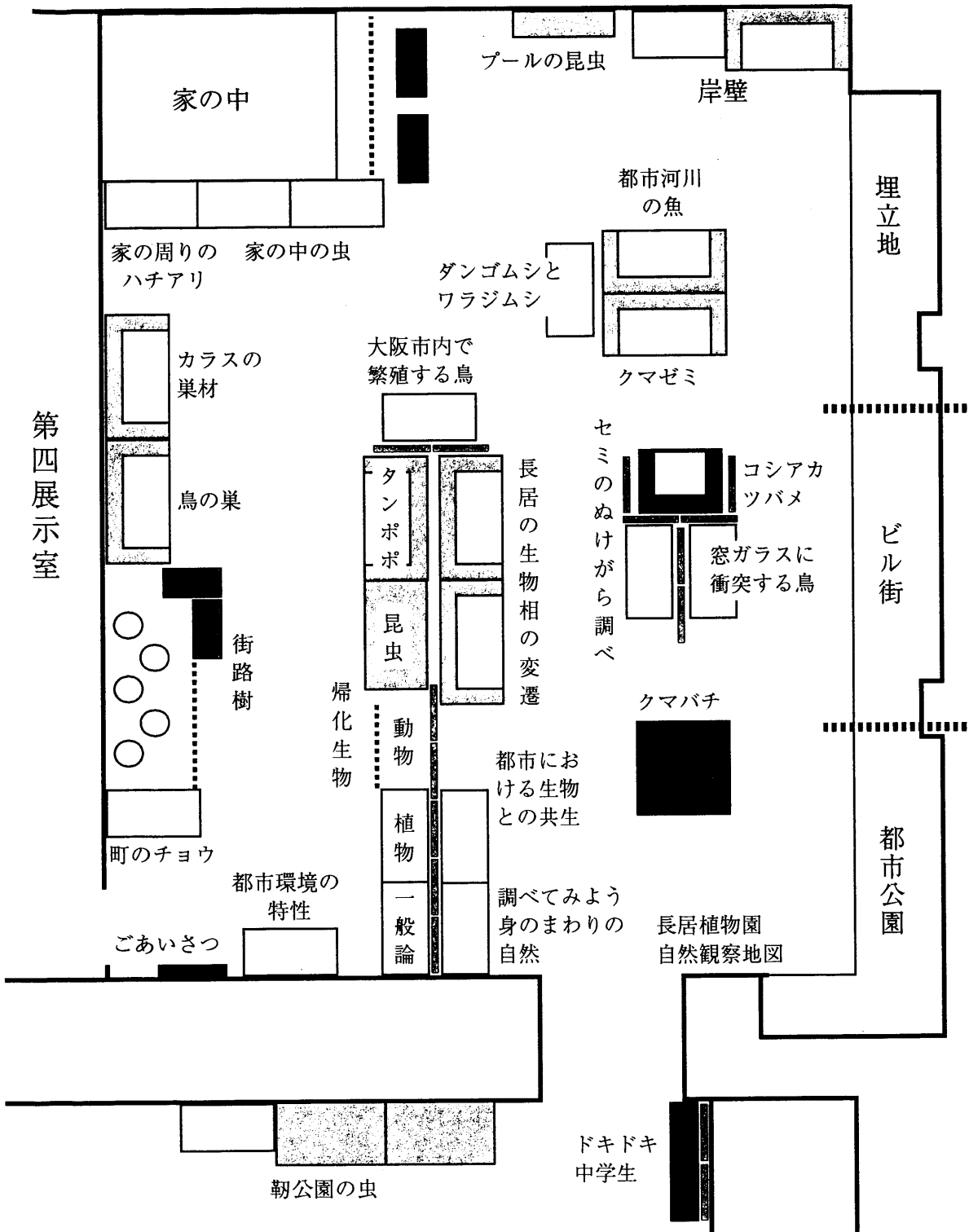


図1. 第25回特別展 展示室配置図

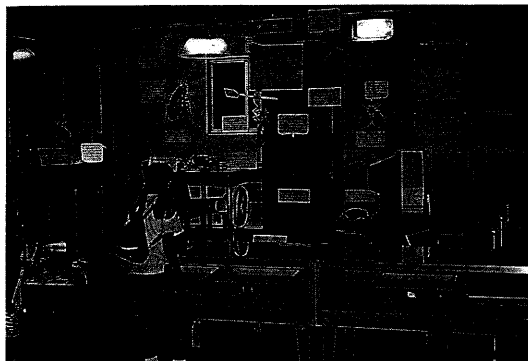


図2. ミニジオラマ「家の中」



図3. ミニジオラマ「家の中」

●関連行事

普及講演会

「街のいきもの 西 vs 東」8月23日（日）

風呂田利夫氏（東邦大学理学部海洋生物学研究室）

東京湾の生物とその暮らし

浜口哲一氏（平塚市博物館）

関東地方の都市部の鳥とセミと鳴く虫と

山本紀久氏（愛植物設計事務所）

都市緑地管理と生物

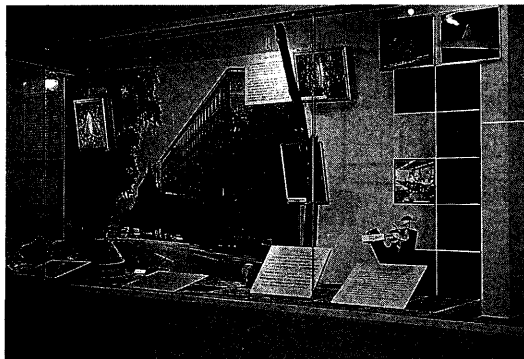


図4. ミニジオラマ「ビル街」

自然史講座

8月8日（土）

和田 岳学芸員（当館動物研究室）

大阪市内の公園で繁殖する鳥

9月12日（土）

初宿成彦学芸員（当館昆虫研究室）

大阪の都市昆虫



図5. ミニジオラマ「都市公園」

Ⅲ. 特別陳列

■新収資料展

あらたに博物館資料に加わった標本のうち、主なものを紹介した。

●期 間：平成10年3月21日（土）から5月31日（日）

●場 所：特別展示室

●主な展示物：

1. アミメニシキヘビ 1頭分

東南アジアに分布し、ボア科に属する大型のヘビ。普通全長は3～6mぐらいであるが、ヘビ類としては世界最長の全長10.1mという記録を持つ。今回展示したのは、大阪市天王寺動物園で1981年4月8日より1994年2月24日に死亡するまで、約13年の長きにわたり飼育され、1996年4月5日に天王寺動物園より移管を受け、骨格標本にしたもの。ちなみに、ボア科のヘビの平均寿命は約16年といわれている。全長は約4.5mで、現在日本で展示されている骨格標本としては最大のものと思われる。なお、受け入れ時の体重は約16kg（皮、内臓を除く）であった。

2. ミンククジラの全身骨格 1頭分

平成8年7月12日、大阪港（住之江区南港東6丁目）の岸壁に、ミンククジラ（全長7.7m）が流れついた。この鯨を当館で解剖し、約1年半、砂場に埋めて骨格標本にしたものを展示した。ミンククジラは、世界中の海にすんでおり、比較的海岸に近いところを泳ぐことも多い。そのため、日本海側を中心に、定置網にかかったり、死んで海岸に流れつく例がみられる。大阪湾では、平成9年にもミンククジラまたはニタリクジラと思われる小型のひげ鯨類が泳いでいるのが確認されている。

3. 古生代の植物化石 10点

陸上植物は古生代の始めころ（5億数千万年前）に出現し、シルル紀の終わり（約4億年前）からデボン紀にかけて大発展した。そして次の時代の石炭紀（3億3千6百万年前から2億9千万年前）には、シダ植物の大森林が出現した。今回の特別陳列では、ヒエニアなどデボン紀の原始的な陸上植物、そしてスティグマリアやカラミテスなど石炭紀の巨大なシダ植物の樹幹を支える地下部、樹皮、孢子嚢などを展示した。

(1) スティグマリア：石炭紀に繁栄したリンボク類や封印木類（シダ植物）の樹幹を支えていた地下部の化石。表面には根の出ていた跡がらせん状に見られる。石炭紀の湿地には、リンボク類などのシダ植物が高さ30mにも

なり、大森林を形成していた。

(2) カラミテス：トクサ類に属するが、樹木状の巨木となり、高さ20mに達する。現生のスギナのように茎には節がある。

4. 樟蔭高校寄贈「牧野富太郎博士採集押し葉標本」10点

日本の植物分類学の開祖ともいべき故牧野富太郎博士採集の押し葉標本。樟蔭高等学校で保管されていたものを同校の厚意によりご寄贈いただいた。1910年前後に採集されたものであるが、当時の生育地からはすでに絶滅したと思われる植物も含まれている。90年近くも昔の標本が今日に至るまで大切に保管されてきたことで、標本の価値はさらに高まっている。

Ⅳ. 館外での展示 巡回展（移動展）など

■「太古のロマンと町の歴史展」に出品

場 所：千林「くらしのエル館」

期 間：平成10年8月1日～3日

展示物：鶴見区城東配水場産クジラ化石5点ならびに
解説パネル、大阪市内完新世貝化石約30点

■場所：弁天町市民学習センター

期 間：平成10年4月25日～5月18日

展示物：大阪地下のクジラ化石 5点、
和泉層群の化石 35点。

■大阪地下の貝化石展

期 間：平成10年8月1日～8月30日

会 場：淀川図書館

展示物：大阪市内の地下から産出した二枚貝、巻貝類
化石約70点

V. 展示関係の出版物・リーフレット

■ミニガイド

●No.16「大阪のテントウムシ」初宿成彦著

内容：大阪府下など近畿中部に分布する3mm以上の
テントウムシ39種類を収録、解説。一般市民向け。
A5横判、本文39+4ページ、カラー図版8ページ。
平成11年3月31日発行、600円。

●No.17「干潟に棲む動物たち」山西良平・波戸岡清峰著

内容：暖温帯海域の干潟に棲息する底生動物155種を
収録、解説。一般市民向け。

B6縦判、本文38ページ、平成11年3月31日発行、

400円。

■特別展解説書

●第25回特別展「都市の自然」解説書

一般市民向け、B5縦判、本文64ページ、カラー図版
4ページ。平成10年8月1日発行。900円。

■特別展解説ビデオ

特別展解説用に制作したビデオを、一般市民向けに発行
した。

●「都市の自然」

内容①：クマゼミの森 都市公園の四季

②：都市の帰化生物

VHS、ステレオ Hi-Fi, 37分, 2000円。

VI. 「自然史探検すくらっちクイズ」

自然史博物館は、大阪市内の他の社会教育施設と同様、平成7年より小中学生の入館料を無料としている。このような状況の中で、展示をよく見ることによって、学習効果をいっそう高めることをめざし、平成8年7月より「自然史探検すくらっちクイズ」を、実施している。問題のカードは10種類用意し各5問となっている。入館時、小中学生に1枚手渡し、5問中正解4問以上の場合には、絵はがきを記念品として配布している。ただし学校団体での見学は対象外としている。

調査研究事業

当館の四つの事業（展覧・調査研究・資料収集保管・普及教育）に、学芸課に所属する学芸員それぞれが、等しく取り組んでいる。これらの四事業を別々のものとしてではなく、互に関連したものにするためには、その根底に調査研究が位置づけられなければならない。本格的な調査研究を通じてこそ、質の高い博物館活動が可能となるからである。

I. 研究体制

学芸員は、館長を除き全員が学芸課に所属し、5部門の研究室で研究業務に携わっている。

館長	那須孝悌 (Takayoshi Nasu)	
動物研究室	山西良平 (Ryohei Yamanishi)	主任学芸員
	波戸岡清峰 (Kiyotaka Hatoooka)	学芸員
	和田 岳 (Takeshi Wada)	学芸員
昆虫研究室	金沢 至 (Itaru Kanazawa)	主任学芸員
	初宿成彦 (Shigehiko Shiyake)	学芸員
植物研究室	岡本素治 (Motoharu Okamoto)	学芸課長
	藤井伸二 (Shinji Fujii)	学芸員
	佐久間大輔 (Daisuke Sakuma)	学芸員
地史研究室	樽野博幸 (Hiroyuki Taruno)	学芸課長代理
	川端清司 (Kiyoshi Kawabata)	学芸員
	塚腰 実 (Minoru Tsukagoshi)	学芸員
第四紀研究室	石井久夫 (Hisao Ishii)	主任学芸員
	石井陽子 (Yoko Ishii)	学芸員

平成11年3月31日現在

II. 個別調査研究

■那須孝悌（館長）

- (1) 長野県野尻湖周辺における後期更新世・完新世の古植生変遷に関する研究（野尻湖花粉グループの一員として）
- (2) 新潟県馬高遺跡周辺における縄文後晩期の古植生に関する研究
- (3) 佐賀県鎮西町における上場台地の形成史および鮮新世古環境の研究
- (4) 静岡平野の上部更新統および完新統層序に関する研究

■山西良平（動物研究室）

- (1) 日本産間隙生多毛類の分類学的研究
- (2) 大阪湾沿岸の潮間帯生物相の調査

■波戸岡清峰（動物研究室）

- (1) ウナギ目魚類の系統分類学的研究
- (2) 大阪湾、瀬戸内海及びその周辺海域の魚類相の調査

■和田 岳（動物研究室）

- (1) ヒヨドリの採食生態に関する研究
- (2) 大阪の都市公園の鳥類相の調査
- (3) 大和川下流域及び周辺ため池の水鳥の個体数調査

■金沢 至（昆虫研究室）

- (1) 日本及び東アジア産キバガの系統分類学的研究
- (2) 近畿地方の蛾類記録の整理
- (3) アサギマダラの移動の調査
- (4) 新生代の昆虫化石・遺体の研究

■初宿成彦（昆虫研究室）

- (1) ハナノミ科甲虫類の分類学的研究
- (2) 新生代の昆虫化石の研究（遺跡の昆虫遺体を含む）
（長野県信濃町野尻湖、大阪市喜連東遺跡、大阪市加美遺跡、大津市栗津湖底遺跡ほか）
- (3) 大阪府および周辺の甲虫類の分布調査（テントウムシ科、ブタクサハムシ、海浜甲虫など）
- (4) 兵隊虫に関する調査

■岡本素治（植物研究室）

- (1) イチョウの種子と胚のサイズ変異の研究
- (2) 被子植物の多様性と系統の研究
- (3) ブナ科の分類学的研究
- (4) コブシの受粉生態学

■藤井伸二（植物研究室）

- (1) コナラ属植物の繁殖生物学
- (2) 西スマトラ地域におけるブナ科植物の分類
- (3) 琵琶湖および周辺域のフロラと植物地理
- (4) 低湿地性植物の繁殖生物学
- (5) 近畿地方における保護上重要な植物に関する研究
（レッドデータブック近畿研究会の一員として）

■佐久間大輔（植物研究室）

- (1) 外生菌根性菌類の生態学的研究
- (2) 丘陵地の生物群集の景観生態学的研究
- (3) 二次林植物群集の研究
- (4) 菌類インベントリーの手法と体制

■樽野博幸（地史研究室）

- (1) ステゴドン科（長鼻類）の分類と系統に関する研究

- (2) 長鼻類の足跡化石に関する研究
- (3) 大阪平野および周辺地域における、鮮新-更新世の古脊椎動物相の変遷と、生層序区分に関する研究
- (4) 備讃瀬戸海底産哺乳動物相に関する研究
- (5) 大阪市および周辺地域の遺跡発掘にともなう層序および脊椎動物遺体に関する研究

■川端清司（地史研究室）

- (1) 四万十帯・日高帯の緑色岩類の産状と構造発達史上の意義に関する研究（山口大学君波氏・新潟大学宮下氏との共同研究）
- (2) 後期白亜紀放散虫化石に関する研究
- (3) 北海道中軸帯、日高帯の古第三紀放散虫化石に関する研究。
- (4) 南アルプスの四万十帯・白亜系の構造発達史に関する研究
- (5) 三重県鳥羽市の恐竜化石産出層準の時代論に関する研究（三重県大型化石発掘調査団の一員として）

■塚腰 実（地史研究室）

- (1) 新生代古植物相の研究
- (2) ハコヤナギ属葉化石の分類学的研究
- (3) 化石および現生球果の分類学的研究
- (4) ブナ属化石の分類学的研究

■石井久夫（第四紀研究室）

- (1) 大阪平野第四紀層産貝化石の古生態と古環境に関する研究
- (2) 大陸沿岸系貝類の研究
- (3) 長野県野尻湖層産淡水貝化石の研究（野尻湖貝類グループの一員として）

■石井陽子（第四紀研究室）

- (1) 大阪平野の上部更新統・完新統の地質層序・地質構造に関する研究
- (2) 長野県野尻湖周辺における中・上部更新統の地質層序・地質構造に関する研究（野尻湖地質グループの一員として）

Ⅲ. 研究業績の公表

■当館より発行された刊行物

* は館外研究者。[No.] は当館業績番号

大阪市立自然史博物館研究報告 (Bulletin of the Osaka Museum of Natural History)

第53号 1999年3月31日発行 67ページ

林 成多*：新潟県中越地方、東頸城丘陵の魚沼層から産

出した後期鮮新世-前期更新世のネクイハムシ亜科の化石。1-22。[No. 351] [英文]

塚腰 実：土岐市北東部の上部新生界土岐砂礫層から産出した葉化石。23-41。[No. 352] [英文]

藤井伸二：近畿地方産スズシロソウの新変種カワチスズシロソウ。43-52。[No. 353] [英文]

戸田 守*・岡田 滋*：九州南部の下甌島と竹島からのシロマダラの新記録。53-56。[No. 354] [英文]

和田 岳：大阪市内の公園で繁殖する鳥の種数について。57-67。[No. 355]

自然史研究 (Occasional Papers from the Osaka Museum of Natural History)

第2巻 第15号。1999年3月31日発行。38ページ。

シンポジウム「21世紀に伝える近畿の植物と自然環境ーレッドデータブック近畿2000年版をめざしてー」記録集 [No. 356~No. 362]

■研究室別報文一覧

大阪市立自然史博物館友の会発行の Nature Study 誌は、ns. と略記した。同誌の表紙が「ジュニア会員のページ」と一連の内容の場合は、表紙を記事の一部とみなしてページを付した。同誌の「未来に残したいとおきの大阪の自然100選」シリーズは、「大阪の自然100選」と略記した。当館学芸員以外の著者には氏名に*を付した。

【館長】

那須孝悌(1998. 3) 植物・花粉化石と鎮西層堆積期の古環境。鎮西町文化財調査報告書第17集「鎮西層(第三紀)の巨木化石ーダイアビルによるタイムカプセルー」：63-69.

那須孝悌(1998. 3) 縄文時代の貯蔵穴。ns. 44 (3) : 25-26.

渡辺正巳*・那須孝悌・木村友美*(1998. 4) ため池堆積物を対象とした花粉分析。「第四紀」(第四紀総合研究会) : 57-64.

那須孝悌(1998. 8) 大都市の立地と非生物環境(ご挨拶にかえて)。大阪自然史博第25回特別展「都市の自然」解説書 : p. ii.

那須孝悌(1998. 8) 海辺の岩石砂漠ー大阪の都市環境一。ns. 44 (8) : 87-89.

那須孝悌(1998. 9) 中国産「孔子鳥化石」購入問題について。博物館研究 33 (9) : 12-14.

那須孝悌(文)・樽野博幸(写真)(1998. 12) 自然史博物

- 館が買った「孔子鳥」化石について. ns. 44 (12) : 143-144.
- 那須孝悌 (1999. 1) 自然史博物館の更なる発展を願って—「花と緑と自然の情報センター (仮称)」建設着工—. ns. 45 (1) : 10-12.
- 那須孝悌 (1999. 2) 淀川の自然とケレップ水制. 大阪の歴史と文化財 2 : 69-74.
- 那須孝悌 (1999. 3) 表紙とジュニア会員のページ「春を待つミツガシワの花芽」. ns. 45 (3) : 25-26.
- 那須孝悌 (1999. 3) 静清バイパス関連の発掘調査資料に基づく静清平野巴川低地の層序・古環境について. (財) 静岡県埋文調査研究所「静岡・清水平野の埋没古環境情報—一般国道1号静清バイパス埋蔵文化財発掘調査1984~1993—」: 27-32.
- 那須孝悌 (文)・樽野博幸 (写真) (1999. 3) コダイアマモの化石—三木茂教授コレクション—. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 31 : 1-11, pls. 1-10.
- [動物研究室]
- Yamanishi R. (1998.12) Ten species of *Pisione* (Annelida: Polychaeta: Pisionidae) from Japan and evolutionary trends in the genus based on comparison of male copulatory apparatus. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory 38 (3/4) : 83-145.
- 山西良平 (1998.12) フジツボ. 12月21日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 山西良平 (1999. 2) ワンド. 大阪市立自然史博物館から. NATURE EYE. 大阪人53 (3) : 63.
- 山西良平 (1999. 3) 淀川汽水域. 3月5日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 波戸岡清峰・平松亘*・池田博美* (1998. 4) 日本初記録のシノビウツボ (新称). I.O.P. Diving News 9 (5) : 2-5.
- 波戸岡清峰 (1998. 6) ハオコゼ. 6月1日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 波戸岡清峰 (1998. 7) 表紙とジュニア会員のページ「地曳網の魚」. ns. 44 (7) : 73-74.
- 波戸岡清峰 (1998.10) マハゼ. 10月9日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 波戸岡清峰・瀬能宏*・加藤昌一* (1998.11) ヒメウツボ (新称) の日本からの記録. I.O.P. Diving News 9 (12) : 2-5.
- 今村 央*・波戸岡清峰 (1998.11) 忘れられたコチ科魚類の和名. 魚類学雑誌 45 (2) : 123-124.
- 波戸岡清峰 (1999. 2) ボラ. 2月14日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 波戸岡清峰 (1999. 3) 新種ができるまで (前). ns. 45 (3) : 27-30.
- 和田 岳 (1998. 5) ツバメ. 5月11日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 和田 岳 (1998. 6) 大阪の都市公園・長居公園の鳥. 私たちの自然 (437) : 16-17.
- 和田 岳 (1998. 8) スズメの子. NATURE EYE. 大阪人 52 (8) : 64.
- 和田 岳 (1998. 8) ヒヨドリ. 8月3日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 和田 岳 (1998. 8) コシアカツバメ. ns. 44 (8) : 85-86.
- 和田 岳 (1998. 9) 都市公園で繁殖する鳥. 教育大阪 (564) : 12-16.
- 大阪鳥類研究グループ (1998. 9) 大阪市内の公園で繁殖する鳥の調査. ns. 44 (9) : 99-101.
- 学芸員体験コース・カメさん調査班 (1998.10) 長居公園に生息するカメの種類と個体数. ns. 44 (10) : 111-112.
- 和田 岳 (1998.11) ユリカモメ. 11月13日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 和田 岳 (1999. 3) 都市公園の鳥. 3月19日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 和田 岳 (1999. 3) 大阪市内の公園で繁殖する鳥の種数について. 大阪市立自然史博物館研究報告 (53) : 57-67.
- [昆虫研究室]
- 金沢 至 (1998. 4) ミノムシ界の異変. 侵入する生物たち. 4月6日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 金沢 至 (1998. 8) 第25回特別展「都市の自然」第25回特別展解説書 (共同執筆). 都会のチョウ, プールの昆虫, アシナガバチとスズメバチ, ジガバチ・トックリバチ類など, カベアナタカラダニ, セアカゴケグモ.
- 金沢 至 (1998. 9) マーキング情報とネットワーク. 特集・アサギマダラ. 昆虫と自然 33 (9) : 31-33.
- 金沢 至 (1998.10) 旅をする蝶—アサギマダラー—の謎. 10月16日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞

- 大阪本社。
- 金沢 至 (1998. 11) セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ。大阪市立自然史博物館から。NATURE EYE。大阪人 52 (11) : 大阪都市協会。
- 金沢 至 (1998. 12) 付記 : 台風に運ばれた? オオギンヤンマ。ns. 44 (12) : 138.
- 金沢 至 (1999. 1) 海を渡ったオオキンカメムシ。1月29日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 金沢 至・アサギマダラを調べる会 (1998. 5) 表紙とジュニア会員のページ「北上するアサギマダラを再捕獲しよう!」。ns. 44 (5) : 49-50
- 金沢 至・福田晴夫* (1998. 9) マーキング調査に参加しよう。特集・アサギマダラ。昆虫と自然 33 (9) : 34-36.
- 金沢 至・山本博子*・中谷憲一*・三枝豊平*・坂井誠* (1997. 10) 和歌山城の地衣食性蛾類相の研究 (1)。日本昆虫学会第58回大会講演要旨, 94 (滋賀県立大学・彦根市)。
- 大島新一郎*・金沢 至・林 久明*・アサギマダラを調べる会 (1998. 5) 1998年の再捕獲速報。アサギマダラ調査報告 (8)。ns. 45 (1) : 3-5.
- 山本博子*・金沢 至・中谷憲一* (1999. 3) 大阪府豊中市産オオミノガからのオオミノガヤドリバエ (仮称) の羽化。はなあぶ (双翅目談話会) (7) : 41.
- 初宿成彦 (1998. 5) 中国にもミンミンゼミ。5月18日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 初宿成彦 (1998. 7) 行事の記録「テントウムシ (第3回)」。バンダナにないナミテントウのまよう。ns. 44 (7) : 80.
- 初宿成彦 (1998. 8) 第25回特別展「都市の自然」第25回特別展解説書 (共同執筆)。人家にすむ生きもの, 世界共通種の多い家屋害虫 (獣), 家の中の虫, 都市部におけるカツオブシムシの変遷, 最近都市部で増えているマサカカツオブシムシ, 公園のセミ, クマゼミの幼虫期間のなぞ, 帰化生物 — 昆虫, アメリカと名のつく昆虫たち, これから拡がる虫 : ブタクサハムシ, ニューヨークのゴマダラカミキリ, しらべてみよう身のまわりの自然 — セミのぬけがら調査。
- 初宿成彦 (1998. 8) クマゼミは長距離移動。8月21日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 初宿成彦 (1998. 9) 大阪への新しい侵入者。NATURE EYE。大阪人 52 (9) : 大阪都市協会。
- 初宿成彦 (1998. 9) ハナノミ科。日本動物大百科, 昆虫Ⅲ。平凡社。
- 初宿成彦 (1998. 11) 兵隊虫。11月27日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 初宿成彦 (1999. 2) 世界のことでナナホシテントウ。ns. 45 (2) : 13-14.
- 初宿成彦 (1999. 3) ハナアブはアホか? — ホバリングに関する議論の記録一。はなあぶ (双翅目談話会) (7) : 42.
- 初宿成彦 (1999. 3) 大阪のテントウムシ。ミニガイド No. 16。大阪市立自然史博物館。40 pp.
- [植物研究室]
- 岡本素治 (1998. 4) ナノハナ。4月27日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 岡本素治 (1998. 7) ちょっとおもしろかった植物園案内の話題。ns. 44 (7) : 75-77.
- 岡本素治 (1998. 8) ヤブガラシ。8月31日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 岡本素治 (1998. 12) ドキドキ自然史ウォッチング学芸員体験コース「ハチ班苦闘の記録」。ns. 44 (12) : 139-140.
- 岡本素治 (1998. 12) クスノキの実。12月4日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 岡本素治 (1999. 3) イヌノフグリ。3月12日付け読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社。
- 藤井伸二 (1998. 4) 野外に出かけよう。NATURE EYE。大阪人 52 (4) : 62.
- 藤井伸二 (1998. 6) スマトラ紀行 (その3)。ns. 44 (6) : 63-66.
- 藤井伸二 (1998. 7) 野菜の栄枯盛衰。NATURE EYE。大阪人 52 (7) : 65.
- 大阪市立自然史博物館編 (1998. 8) 都市の自然。(分担執筆)
- 藤井伸二・栗林実* (1998. 8) 私のフィールドノートから㊦オオマルバノホロシの散布方法について。ns. 44 (8) : 92-93.
- 藤井伸二 (1998. 11) オニバスの葉に人は乗れるのか? — 学芸員体験コース・オニバス班の記録一。ns. 44 (11) : 122-124.
- 藤井伸二 (1998. 12) 滋賀県で生育が再確認されたヌマゼリの生態。植物分類地理 49 (2) : 201-204.
- 藤井伸二 (1998. 12) 琵琶湖の乙女ヶ池内湖にボタンウキ

- クサ. 水草研究会会報 65: 21.
- Yoneda, T. *, S. Fujii and S. Nishimura * (1998)
 “Storm impact on an equatorial rain forest in West Sumatra, Indonesia.” Poonswad, P. ed. The Asian Hornbills: Ecology and Conservation. Thai Studies in Biodiversity 2: 161–201.
- 藤井伸二 (1999. 1) 私のフィールドノートから ㊸ オオイヌタデの浮き袋. ns. 45 (1): 6.
- 藤井伸二 (1999. 2) 私のフィールドノートから ㊹ 埋込地に出現した干潟もどきの水たまり. ns. 45 (2): 21.
- Fujii, S. (1999. 3) *Arabis flagellosa* var. *kawachiensis* (Cruciferae), a new variety from Kinki district, Central Japan. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist. (53): 43–52.
- 藤井伸二 (1999. 3) レッドデータブック作成と利用の課題. 自然史研究 2 (15): 214–216.
- 藤井伸二・瀬戸剛* (1999. 3) 身近な植物の危機, 近畿地方の現状. 自然史研究 2 (15): 217–218.
- 藤井伸二・藤井俊夫* (1999. 3) 近畿地方の植物分布図 文献一覧 (予報). 自然史研究 2 (15): 237–244.
- 佐久間大輔 (1998. 8) きのこと・キノコ・茸・木の子. ハーモニー (43): 1–2
- 大阪市立自然史博物館編 (1998. 8) 都市の自然. (分担執筆)
- 佐久間大輔 (1998. 9) ボトムアップアプローチによるピクトマップ作成の試み. 国際景観生態学会日本支部会報 4 (2): 29–32
- 佐久間大輔 (1998. 9) 表紙とジュニア会員のページ「傘のもようなぞ」. ns. 44 (9): 97–98.
- 佐久間大輔 (1999. 2) スーパーでキノコ観察. NATURE EYE 大阪人. 53 (2):
- 佐久間大輔 (1999. 3) 日本の菌類インベントリーに向けて. 日本菌学会会報 40: 42–43
- [地史研究室]
- 樽野博幸 (1999. 3) 岸和田市流木町産ワニ化石. 「岸和田市流木町産ワニ化石発掘調査報告書」, 1–26. きしわだ自然資料館.
- Jin, Chang-zhu *, Kawamura, Y. * and Taruno, H. (1999. 3) Pliocene and Early Pleistocene insectivore and rodent faunas from Dajushan, Qipanshan and Haimao in north China and the reconstruction of the faunal succession from the Late Miocene to Middle Pleistocene. Jour. Geosci., Osaka City Univ. 42 (1): 1–19.
- 川端清司 (1998. 4) 地層のタイムマシン. 4月20日付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 川端清司 (1998. 5) 博物館への誘い (その4) 大阪市立自然史博物館, ぼなんざ (金属鉱業事業団広報誌) (270): 28–34.
- 川端清司・三重県大型化石発掘調査団 (1998. 6) 三重県鳥羽市の松尾層群から発見された恐竜化石胚胎層群から産出した放散虫化石, 日本古生物学会第147回例会予稿集: 22.
- 川端清司 (1998. 8) JR大阪駅の化石でタイムトリップ体験. 8月28日付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 川端清司 (1998. 9) 付加体中の現地性緑色岩 (奄美大島の名瀬層) 一泥質岩の化学組成, 日本地質学会 第105年学術大会講演要旨集: 124.
- 川端清司 (1998. 10) 宝石になった化石, NATURE EYE. 大阪人 (52): 71
- 川端清司 (1998. 12) 海嶺が沈み込む話 (その7), ns. 44 (12): 135–137.
- 川端清司 (1998. 12) 楽しく「化石さがし」. 12月11日付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 塚腰 実 (1998. 4) 西南日本における後期中新世～鮮新世の古植物相の変遷 一第三紀型分類群の消滅と種の現代化一. 文部省科学研究費補助金, 基盤研究 (C2) 研究成果報告書, 60 p.
- 塚腰 実 (1998. 4) エゴノキの種子, ns. 44 (4): 39–42.
- 塚腰 実 (1998. 6) 愛知県知多半島南部の東海層群から産出した植物化石, 日本古生物学会第147回例会予稿集, 26.
- 塚腰 実 (1998. 6) クロマツのマツボックリ. 6月29日付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
- 塚腰 実 (1998. 7) 岐阜県笠原町の瀬戸層群土岐砂礫層から産出した *Pinus trifolia* Miki の球果化石. 地質学雑誌 104 (7): 495–498.
- 塚腰 実 (1998. 9) 東海層群から産出するブナ属化石, 日本地質学会 第105年学術大会講演要旨集: 296.
- 塚腰 実 (1998. 10) 表紙とジュニア会員のページ「鋸歯と葉脈」. ns. 44 (10): 109–110.
- 塚腰 実 (1998. 10) 葉の血管と骨, 葉脈. 10月23日付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.

- 塚腰 実 (1999. 2) ノグルミの果実, ns. 45 (2) : 15-18.
 塚腰 実 (1999. 2) メタセコイアは中国原産. 2月19日
 付読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 Tsukagoshi, M. (1999. 3) Leaf fossils from the
 Upper Cenozoic Toki Sand and Gravel Formation
 in the northeastern part of Toki City, Gifu
 Prefecture, central Japan. Bull. Osaka Mus. Nat.
 His. (53) : 23-41.

[第四紀研究室]

- 石井久夫 (1998. 4) 表紙とジュニア会員のページ, 生き
 ている化石 ヌノメアカガイ, ns. 44 (4) : 37-38.
 石井久夫 (1998. 5) 二上山のミクロな宝石. NATURE
 EYE. 大阪人 52 (5) : 71.
 石井久夫 (1998. 6) ヌマコダキガイ. 6月22日付読売新
 聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 石井久夫 (1998. 6) 海進期に短期間出現する大陸沿岸系
 二枚貝類 (講演要旨). 化石研究会会誌, 31 (1) : 27.
 石井久夫 (1998. 9) ドブガイが歩いたあと. 9月25日付
 読売新聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 石井久夫 (1998. 11) 食材の (古) 貝類学その1 ハマガ
 リ. ns. 44 (11) : 125-127.
 石井久夫 (1998. 12) マングローブシジミの化石.
 NATURE EYE. 大阪人 52 (12) : 69.
 石井久夫 (1999. 1) 表紙とジュニア会員のページ, アラ
 ムシロガイのクラゲパーティー. ns. 45 (1) : 1-2.
 石井久夫 (1999. 1) シャミセンガイ. 1月22日付読売新
 聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 石井久夫 (1999. 3) 加茂谷川岩陰遺跡出土の軟体動物
 (貝類) 一宝伝岩陰遺跡を中心として一. 同志社大学文
 学部考古学調査報告第10冊 徳島県三好郡三加茂町所在
 加茂谷川岩陰遺跡群, IV 付編 2 : 107-110.
 本郷美佐緒 *・石井陽子・鈴木 保 * (1998. 3) 長野県
 信濃町の中部更新統針ノ木層の花粉化石群集. 野尻湖ナ
 ウマンゾウ博物館研究報告 (6) : 9-16.
 石井陽子 (1998. 5) 野尻湖の生い立ちに迫る大露頭. ns.
 44 (5) : 51-53.
 石井陽子 (1998. 6) 火山弾と地層の変形. NATURE
 EYE. 大阪人 52 (6) : 66
 石井陽子 (1998. 6) ガーネット. 6月8日付読売新聞特
 集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 石井陽子・野尻湖地質グループ (1998. 8) 長野県信濃町
 貫ノ木周辺の中～上部更新統. 日本第四紀学会講演要旨

集28 : 86-87.

- 石井陽子 (1998. 10) 上町台地の井戸. 10月2日付読売新
 聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.
 石井陽子 (1998. 12) 表紙とジュニア会員のページ, リッ
 プルマーク. ns. 44 (12) : 133-134
 石井陽子 (1999. 2) 高温石英の結晶. 2月5日付読売新
 聞特集ライフ自然流記事, 読売新聞大阪本社.

IV. 文部省科学研究費補助金を受けて行った研究

平成10年度は該当なし

V. 藤原ナチュラルヒストリー振興財団の助成金を受けて行った研究

研究課題	研究代表者
東アジアのハナノミ科における 属の再検討 (継続中)	初宿 成彦

- 2月20日～3月28日にロンドン自然史博物館 (イギリス),
 パリ国立自然史博物館 (フランス), ドレスデン動物学
 博物館 (ドイツ) において, 5週間にわたり, おもにタ
 イプ標本の検討を行った.
 ○日本甲虫学会例会において, 海外の博物館のようすを紹
 介した (平成11年4月11日).
 ○学会および学術誌等において, 研究成果を報告する予定
 である.

VI. 海外出張

■初宿成彦

東アジアのハナノミ科における属の再検討
 V. を参照.

■波戸岡清峰 (イギリス他)

1. 研修期間 : 平成10年12月26日～平成11年3月25日
2. 研修先 : イギリス (ロンドン, 自然史博物館), オラ
 ンダ (ライデン, 国立自然史博物館)
3. 派遣資格 : 文部省生涯学習局による平成10年度学芸員
 等在外派遣研修の研修生として
4. 研修テーマ : 魚類標本の永久保存・展示技術の改良お
 よび情報提供のための登録・管理システムについての研究
5. 研修内容 : 魚類 (おもにウナギ目魚類) について, 受
 入館に保存されている模式標本 (新種発表の際に使わ

れる学術上重要な標本)と標本台帳の記載事項との照合を行い、展示標本の作成過程や展示を見学した。自然史博物館では、現在進行中の標本台帳原簿のコンピュータによるデータベース化の入力作業補助も行った。

6. 研修成果：標本瓶全体が資料であるという標本管理の基本概念の把握と、この概念に基づくソフト（人的側面も含む）・ハード（保管庫、保管器具など）両面にわたる恒久的な標本管理システムの習得。液浸標本を展示する際の剥製や骨格標本の効果的な利用法の習得。標本を効率よく利用するためのデータベースのファイルシステムの構築法の習得等。また、ウナギ目魚類の分類学的整理などの学術的成果もあった。

7. 日 程

- 12月26日 大阪発、ロンドン着
1月 4日 ロンドン、自然史博物館へ（2月19日まで滞在研修）
2月20日 ロンドン発、アムステルダム着
2月22日 ライデン、国立自然史博物館へ（3月23日まで滞在研修）
3月25日 アムステルダム発
3月26日 大阪着

VII. インターネットによる研究環境の支援

博物館では平成9年度からインターネットシステムを導入し、市民への情報発信とともに研究活動に利用している。利用の形態は主にホームページの閲覧による研究情報の収集、電子メールの利用、FTPによる外部資料の利用などである。平成10年度は自然史関連の研究支援を目的としたメーリングリストの運用を行い様々な分野での博物館内外の研究者に利用されている。現在運用されているメーリングリストは6グループ延べ参加登録者数は214名である。

— 16 —

資料収集保管事業

I. 主な購入標本

■昆虫研究室

北脇和光コレクション 13,095点

■地史研究室

中国雲南省産古生代無脊椎動物化石 26点

ドイツ産ジュラ紀アンモナイト顎器化石 1点

アメリカ合衆国ユタ州産カンブリア紀カイメン化石

・ゴギア化石 2点

アメリカ合衆国ニューヨーク州産ウミサソリ化石など 3点

多賀町産アケボノゾウ レプリカ 84点

アルゼンチン産ジュラ紀ソテツ類樹幹化石 1点

ジンバブエ産ナンヨウスギ樹幹化石 1点

アルゼンチン産ジュラ紀ナンヨウスギ球果化石 5点

ブラジル産木生シダ樹幹化石 2点

ドイツ産ペルム紀裸子植物枝条化石など 12点

北海道産球果化石レプリカ 1点

II. 寄贈および交換標本

■動物研究室

和歌山県産ホオジロ他 3点 福岡 賢造氏

東成区産ホシハジロ 1点 和田あづみ氏

堺市産ユリカメモ 1点 浦野 信孝氏

八尾市産ヤモリ 1点 田中 久一氏

大東市産ウグイス 1点 森本 佳秀氏

滋賀県草津市産ハヤブサ 1点 田村真樹子氏

屋久島産トラツグミ 1点 半谷 吾郎氏

和歌山市田倉崎海岸産魚類 5点 大阪湾海岸生物研究会

友ヶ島産魚類 7点 大阪湾海岸生物研究会

石川県能登島産アメガジ他 4点 池口新一郎氏

和歌山県産ウナギ目魚類 2点 池田 博美氏

羽曳野市産ノゴマ 1点 飯塚 謙三氏

住之江区産メボソムシクイ 1点 西尾フミ子氏

淡路島南淡町産魚類 43点

大阪市立自然史博物館友の会

兵庫県三田市産スズメ・ムクドリ 2点

近藤 雅博・近藤 仁志氏

泉大津市産トラフズク他 4点 浦野 信孝氏

堺市産ノゴマ・ハシブトガラス 2点

浦野 千尋・浦野 信孝氏

堺市産スズメ 1点 弘岡 知樹氏

大阪湾産チチュウカイミドリガニ 24点 鍋島 靖信氏

堺市産イタチ 1点 西廻 春雄氏

福井県高浜町産ムクドリ 1点 熊代 直生氏

羽曳野市産ムクドリ 1点 津田 滋氏

箕面市産オオマシコ他 3点 鈴木 宏介氏

堺市産スズメ 1点 浦野 信孝氏

八重山諸島産セマルハコガメ 1点 溝口 修氏

箕面市産スズメ 1点 宮武 頼夫氏

松原市産ハシブトガラス 1点 六車 恭子氏

堺市産アイナメ 1点 浦野 拓人氏

山口県西部河川河口および福岡県曽根干潟産海岸動物

758点 大阪湾海岸生物研究会

奄美大島産タイマイ 1点 西村寿美子氏

淀川産ウナギ稚魚 1点 橋田 俊彦氏

兵庫県山南町産ヒバカリ 1点 田代 貢氏

三宅島産ムシクイ他 2点 森 哲氏

和歌山県白浜町産メジロ 1点 石田 惣氏

愛媛県宇和島市周辺産ウナギ属2種 2点 水野 晃秀氏

大和川産ウミネコ・バリケン 2点 中津 賞氏

和歌山県産ユビナガコウモリ他 4点

浦野 信孝・上杉麗未菜・志水 沙織氏

堺市7-3区埋立地産ナガカイミジンコ

Herpetocypris intermedia 3点 山本 博子氏

宝塚市産チュウサギ 1点 熊代 直生氏

堺市産ツバメ 1点 福岡 賢造氏

箕面市産イタチ 1点 有馬研一郎氏

高槻市産メボソムシクイ他 4点 小西 敏雄氏

和歌山県千里海岸産アカウミガメ他 4点 浦野 信孝氏

奈良市産シマヘビ 1点 田代 貢氏

愛媛県伊予灘産魚類 28点 清水 孝昭氏

天王寺動物園のワシミミズク他 67点 高見 一利氏

ミノウミウシ類 1点 濱谷 徹氏

神戸市舞子浜産無脊椎動物 4点 金井真知子氏

淀川産カニ類 3点 山下 隆司氏

泉南市男里川河口産ウモレベンケイガニ

Clistacoeloma merguense 1点 山下 隆司氏

神戸市垂水海岸産潮下帯無脊椎動物 7点 榎本 幸人氏

等脚類副模式標本 39点 布村 昇氏

犬寄生のフィラリア 15点 浦野 信孝氏

神戸市舞子浜産サンショウウニ・シワガザミ

3点 高木紀代子氏

和歌山県日高町産ハリザオウニ 1点 小郷 一三氏

神戸市新舞子浜産ウモレマメガニ 16点 佐名川洋之氏

淡路島丸田浜産ヒライソガニ 1点 鍋島 靖信氏

資料収集保管事業

和歌山県太地町産ヘリトリマンジュウガニ	1点	山下 隆司氏	平野区産シロハラ	1点	田代 貢氏
和歌山県小浦産魚類	34点	大阪湾海岸生物研究会	豊中市産シロハラ	1点	西本 安宏氏
愛媛県産ユメタチモドキ	1点	清水 孝昭氏	旭区産アカハラ・メボソムシクイ	2点	前田 秀子氏
堺市産イタチ	1点	谷田 一三氏	富田林市産モグラ	1点	西野 三郎氏
高石市産コルリ	1点	中津 賞氏	鹿児島県徳之島産ミフウズラ	1点	今堀るみ子氏
神戸市垂水産潮下帯動物	57点	榎本 幸人氏	西宮市産メボソムシクイ	1点	田中 貞之氏
奈良市産スズメ他	3点	粉川 昭平氏	堺市産メボソムシクイ・カルガモ他	4点	浦野 信孝氏
貝塚市産鳥類・モグラ	6点	白木江都子氏	大阪湾産ギマ他	3点	大阪市立自然史博物館友の会
大台ヶ原産テン	1点	富永 修氏	和歌山県白浜町産コケギンボ類	2点	山崎 公裕氏
和歌山県西広海岸他産カニ類	4点	山下 隆司氏	枚方産イタチ	1点	梶山 健二氏
淀川河口産ガザミ	1点	山下 隆司氏	長居産シロハラ・ヒヨドリ	2点	松本 範子氏
淀川河口産ノコギリガザミ	1点	山下 隆司氏	石垣島産ツブテナガエビ・中国貴州省産サワガニ類	2点	西川 喜朗氏
東住吉区今川産オニバス付着動物	56点	河上 康子氏	大阪湾堺泉北港産モンツキイシガニ		
大阪湾産チチュウカイミドリガニ	120点	鍋島 靖信氏	<i>Charybdis lucifera</i>	2点	鍋島 靖信氏
和歌山県粉河町産ニホンイタチ	1点	山本 浩久氏	堺市出島産モンツキイシガニ他	7点	梅崎希美代氏
台湾産ヤマカガシ類 <i>Rhabdophis tigrinus formosanus</i>	1点	太田 英利氏	寄生虫各種・コウガイビル	36点	浦野 信孝氏
大阪府豊能町産ヤマカガシ	1点	萩原 寛氏	岬町産ヒメシオマネキ	1点	鍋島 靖信氏
イラク産トゲオアガマ	1点	根本 哲氏	淀川産タイワンガザミ・ガザミ	2点	山下 隆司氏
神戸市垂水産イトヒキヨウジ	1点	反田 實氏	和歌山県周参見町産タカチホヘビ	1点	西川 喜朗氏
京都市深泥池産ワニガメ	1点	中島みどり氏	奈良市産ニホンヤモリ	1点	田代 貢氏
松原市産タイリクイタチ	1点	大槻 悦子氏	京田辺市産メジロ	1点	湯川 幸子氏
西淀川区産イタチ	1点	伊藤 宣範氏	東住吉区産タイリクイタチ	1点	
若狭湾産ムラサキダコ	1点	林 勇夫氏	上浦 淳子・白井 萌・津口美紗子・田中 佑季氏		
神戸市須磨産アイブリ	1点	佐名川洋之氏	兵庫県淡路町産コブヨコバサミ・コシダカガンガラ	2点	山下 隆司氏
茨木市産ヤマカガシ	1点	萩原 寛氏	堺市産モンツキイシガニ・シマイシガニ	13点	鍋島 靖信氏
奈良女子大学構内産メボソムシクイ	1点	浦部美佐子氏	和歌山県由良町産ノコギリウニ・ヒラタブンブク	2点	後藤 宏氏
四条畷市産カイツブリ	1点	中津 賞氏	奈良県橿原市産ツグミ	1点	宮武 頼夫氏
兵庫県三田市産スズメ	1点	近藤 雅博氏	吹田市産ヒヨドリ	1点	石橋 聡氏
枚方市産シロハラ・スズメ	2点	梶山 健二氏	伊丹市産キジバト	1点	坂根 隆治氏
大阪湾南港産カライワシ	5点		兵庫県太子町産トラツグミ	1点	石田 照夫氏
フィッシングショップTポート			豊中市産トラツグミ	1点	岡 恒夫氏
都島区のマミチャジナイ	1点	松山 利夫氏	奈良市産フクロウ	1点	乾 喜宏氏
鹿児島県下甕島産シロマガラ	1点	戸田 守氏	兵庫県姫路市産ヒドリガモ	1点	黒田 治男氏
和泉市産ヤマガラ	1点	長塚 道子氏	茨木市産ノゴマ	1点	有澤三喜夫氏
中国産カエル類	2点	西川 喜朗氏	北海道小樽産潮間帯貝類	55点	花井 永実氏
長居産ツグミ	1点	狩野登之助氏	堺市産キビタキ	1点	佃 十純氏
阿倍野区産シロハラ	1点	堀口 昭保氏	伊丹市昆陽池産アオサギ	1点	熊代 直生氏
三重県白山町産トラツグミ	1点	田代 貢氏	兵庫県加古川市産ヒドリガモ	1点	黒田 治男氏
枚方市産ノゴマ	1点	稲森 郁子氏			
長居産シロハラ	1点	松本 範子氏			

京都市産カワセミ	1点	田口 勝義氏	完・副模式標本	2点	谷角 素彦氏
枚方市産メジロ	1点	梶山 健二氏	ルリクワガタ属 1 新種・1 新亜種 (<i>Platycerus businskyi</i>		
貝塚市産ウミアイサ	1点	貝塚市自然遊学館	<i>bashanicus</i> および <i>P. kitawakii</i>) 完・副模式標本		
和歌山県産アオジ	1点	福岡 賢造氏		4点	谷角 素彦氏
高石市産タヌキ	1点	川端 昭明・宏江氏	ルリクワガタ属 1 新種 (<i>Platycerus consimilis</i>)		
高槻市産ヒヨドリ	1点	杉之原専司氏	完・副模式標本	2点	谷角 素彦氏
吹田市産メジロ	1点	川端万紀子氏	大正区産ツマグロカミキリモドキ	1点	杉本 明貞氏
■昆虫研究室					
日本産トンボ類 (故・伊藤宏コレクション)			中国産バッタ類	40点	黄 春梅氏
	122点	伊藤 富子氏	欧州産甲虫類	58点	Vladimir Tichey氏
関東および中部地方産ヒシバッタ類など			■植物研究室		
	245点	市川 顕彦氏	寄贈および交換 (*) 標本.		
日本産昆虫類	1,127点	富永 修氏	日本産植物	80点	梅原 徹氏
日本および東南アジア産昆虫類	111点	市川 顕彦氏	日本産植物	100点	小林 禎樹氏
大泉緑地のウシカメムシ	1点	佃 十純氏	日本産植物 *	200点	頌栄短期大学
台湾産エゾゼミ属の抜け殻	4点	岡田 誠氏	白花品ホトケノザ他	2点	市川 顕彦氏
香川県飯山町産のナガサキアゲハ雌	1点	西尾フミ子氏	近畿地方産タチタネツケバナ *	10点	
日本および世界産昆虫類	25点	市川 顕彦氏			兵庫県立人と自然の博物館
関東・中部地方産直翅類	16点	石川 均氏	長野県産ヒメグルミ	1点	石井 久夫氏
奈良県大塔村産昆虫類	5点	伊東 徳治氏・塚腰 実氏	大阪府産帰化植物	7点	植村 修二氏
群馬県産キヌツヤミズクサハムシ化石	8点	林 成多氏	茨木市産ツノゴケ	1点	西川 喜朗氏・市川 顕彦氏
生駒の昆虫 (故・引田茂コレクション)			淡路島産ハマウツボ	1点	杉浦 真治氏
	104点	引田 ひさ子氏・雅生氏	日本産植物	140点	福原 達人氏
愛知県産オオミズクサハムシ	4点	長谷川道明氏	サバ州産植物 *	37点	兵庫県立人と自然の博物館
オニヒゲナガコバネカミキリ	1点	興水 太伸氏	大阪府産マヤラン	1点	山住 一郎氏
堺市のイエシロアリ	30点	山本 博子氏	北米産植物 *	57点	カーネギー博物館
韓国産昆虫類	27点	木下総一郎氏	果実付きジンチョウゲ	1点	平田 和代氏
兵庫県のヒメハナノミ	8点	稲畑 憲昭氏	都祁村産タチカモメヅル	1点	宮武 頼夫氏
南アルプス産ダイモンテントウ	2点	斉藤 昌弘氏	和歌山県産モクセイ属植物	20点	村瀬ますみ氏
インドネシア産ゾウムシ類	48点	奥田 則雄氏	大阪府産帰化植物	5点	植村 修二氏
日本産チョウ・トンボ・ガ	7,896点	北脇 善和氏	河内長野市産ホウライシダ	1点	西岡 宏一氏
日本産昆虫類	33点	春沢圭太郎氏	猪名川産帰化植物	1点	山田 年子氏
長野県美ヶ原産蛾類	32点	永瀬 幸一氏	スゲ科植物	5点	織田 二郎氏
大阪湾岸の甲虫	1,915点	河上 康子氏	日本産植物 *	300点	頌栄短期大学
日本産オオキノコムシ科同定標本	31点	生川 展行氏	日本産植物 *	100点	兵庫県立人と自然の博物館
日本産双翅類	70点	春沢圭太郎氏	京都府産オオトリゲモ *	1点	大本花明山植物園
南西諸島産チョウ・セミ (加島義男コレクション)			大阪府産イセウキヤガラ	2点	上久保文貴氏
	218点	久保 利夫氏・竹内 啓一氏	兵庫県産植物 *	80点	兵庫県立人と自然の博物館
日本産甲虫類ほか	1,344点	河上 康子氏	日本産カヤツリグサ科植物	4点	織田 二郎氏
世界のカミキリムシ類 (故・林匡夫コレクション)			友ヶ島産トサムラサキ	6点	迫田 昌弘氏
	10,000点	田中 元子氏	門真市産オオアカウキクサ	1点	和田 岳氏
ルリクワガタ属 1 新種 (<i>Platycerus miyatakei</i>)			大阪府産帰化植物	2点	田中 光彦氏

オーストラリア産植物*	340点	アデレード植物園
兵庫県産植物	30点	小林 禎樹氏
兵庫県産スズメハコベ	1点	田村 和也氏
大阪府産ヤナギスカボ他	8点	植村 修二氏
四條畷市産ドクゼリ	1点	田中 光彦氏
日本産植物*	300点	大本花明山植物園
引田茂氏採集お葉付きイチョウ	150点	引田 雅生氏
河内長野市産菌類標本	20点	田中久美子氏
京田辺市産サルノコシカケ類	40点	池添 皓氏
豊中市産標本	5点	大西あけみ氏
伊賀産ミズトラノオ	2点	吉住 卓家氏
泉州産植物標本	200点	清水 千尋氏

■地史研究室

山辺層群産植物化石	1点	佐藤 隆春氏
大阪層群産植物化石(引田 茂コレクション)		
	422点	引田 雅生氏
神戸層群産植物化石(大賀コレクション)		
	1,200点	大賀 吉祐氏
北海道産中生代化石(解良コレクション)		
	70点	解良 康治氏
瀬戸層群産含植物化石泥岩	1点	細山 光也氏
日本産新生代植物化石(米阪コレクション)		
	1,400点	米阪 紀雄氏

■第四紀研究室

大阪市内ボーリング資料	47件	大阪市都市整備局
同 上	2件	大阪市交通局
同 上	14件	大阪市下水道局
上町断層系住之江橋曲オールコアボーリング資料		
	1件	工業技術院地質調査所
明石海峡大橋地質調査資料	1件	本州四国連絡橋公団

Ⅲ. 館員による資料収集

■館長(那須)

10月9～10日 新潟県朝日村三面 花粉・孢子試料

■動物研究室

担当学芸員は山西…Y, 波戸岡…Hと略記する。

周防灘周辺で干潟の底生動物を採集(5月, Y, H)

和歌山県小浦海岸で海岸動物を採集(8月, Y, H)

吉野川河口(徳島県)で潮間帯動物を採集(9月, Y)

西表島(沖縄県)で魚類他を採集(11月, H)

北海道東部で潮間帯動物を採集(11月, Y)

諫早湾(長崎県)で潮間帯動物を採集(11月, Y)

西表島(沖縄県)で潮間帯動物を採集(3月, Y)

■昆虫研究室

日本産昆虫の平均的収集, 大阪府産昆虫の完全な収集等の目的で, 担当学芸員(金沢-K, 初宿-Sと略記)が行った出張は次の通りである。便宜上, 調査研究や資料収集のためばかりでなく, 普及行事やその予備調査の際の出張も含めて記した。

4月7日	滋賀県安曇川町	甲虫類(S)
4月21日	高槻市上牧	甲虫類(S)
4月25日	高槻市三島江	レンゲ畑の昆虫(K)
5月9～10日	淡路島	昆虫全般(S)
5月11日	和歌山市和歌山城, 六十谷, 直川	ミノガ類(K)
5月17日	兵庫県猪名川町杉生新田, 大野山	昆虫全般(K)
5月17日	京都市貴船	ムカシトンボ(S)
5月20日	泉南市箱作	海浜甲虫(S)
5月21日	長居公園市民プール	プールの昆虫(K)
5月23日	長居公園市民プール	プールの昆虫(K・S)
5月25日	豊能町東ときわ台	テントウムシ(S)
6月2・7日	高槻市出灰～中畑	昆虫全般(K)
6月7日	豊能町東ときわ台～初谷	テントウムシ(S)
6月20日	和歌山市和歌山城	ミノガ類(K)
6月28日	兵庫県猪名川町大野山	昆虫全般(K)
6月30日	奈良県香芝市～大阪府太子町	昆虫全般(S)
7月2日	河内長野市天見	昆虫全般(S)
7月5日	奈良県香芝市～大阪府太子町	昆虫全般(S)
7月10日	淀川区西中島	汽水性昆虫(S)
7月17日	京都府八幡市	甲虫類(S)
7月19日	河内長野市天見	昆虫全般(S)
7月20日	長居公園	セミ(S)
7月26日	長居公園	セミ(S)
8月2日	長居公園	セミ(S)
8月8～9日	奈良県大塔村	昆虫全般(S)
8月9日	滋賀県志賀町比良山八雲ヶ原	アサギマダラ(K)
8月11・12日	兵庫県猪名川町大野山, 杉生新田	昆虫全般(K)

8月16日	滋賀県志賀町比良山琵琶湖パレイ	アサギマダラ (K)	6月30日, 7月1日	北海道渡島半島	新生代植物化石 (G)
8月18～22日	長野県野尻湖	昆虫化石 (S)	9月18日	泉南郡岬町	現生水草標本 (G)
8月26日	滋賀県甲西町野洲川	ブタクサハムシ (S)	11月29日	泉佐野市滝の池	中生代白亜紀貝化石など (T・G・K)
9月6日	韮公園	セミのぬけがら (S)	10月6～8日	新潟県佐渡島	関植物群植物化石 (G)
9月12・13日	東大阪市枚岡公園	蝶蛾の幼虫 (K)	12月5日	滋賀県大津市	石英 (K)
9月19～20日	京都府芦生	昆虫全般 (S)	12月1, 20日	奈良県都祁村	都介野層群植物化石, 貝化石. (G, I)
9月26日	箕面市箕面川ダム	昆虫全般 (S)	1月22日, 2月21日	京都府相楽郡加茂町法花寺野	バラ輝石・ホルンフェルス (K・I)
10月19日	箕面市箕面川ダム	蛾類 (K)	3月15～16日	岐阜県土岐市, 多治見	瀬戸層群植物化石 (G)
10月21～25日	三重県鳥羽市～熊野市	アサギマダラ (K)	3月27～30日	三重県長島町, 大王町	中生代放散虫化石 (K)
10月26日	ボンボン山	昆虫全般 (S)	■第四紀研究室 担当者名は石井久夫…IH, 石井陽子…IYと略記する。		
10月31日	京都市中京区, 京都府綾部市	ブタクサハムシ (S)			
11月1日	ボンボン山	昆虫全般 (S)	4月18日, 6月22日, 1999年3月12日	三重県芸濃町石山観音	鈴鹿層群淡水貝化石 (IH)
11月23日	箕面市箕面川ダム	昆虫全般 (S)	4月26日	和歌山県	三波川帯キースラガー鉱床 (IY, 樽野)
11月30日	箕面市箕面川ダム	蛾類 (K)	5月22日	広島県庄原市	備北層群貝化石 (IH)
1月6日	箕面市箕面川ダム	昆虫全般 (S)	5月23～25日	山口県・北九州市瀬戸内海沿岸	現生貝類 (IH)
3月7日	大阪市此花区舞洲	クモ (K)	6月20日	長野県辰野町小野泥炭層	(昆虫化石) (IY)
■植物研究室 調査研究なども含めた資料収集のうち, 以下に主なものを記す。担当学芸員は, 藤井…F, 佐久間…Sと略記する。			8月3日	島根県中海, 宍道湖	現生貝類 (IH)
			8月3日	鳥取県鳥取砂丘	大山起源の火山砕屑物 (IY)
5月9日	堺市	(F)	9月20日, 11月1, 3, 5日	淀川河口域	汽水域現生貝類 (IH)
5月10日	淡路島	(F)	9月24日	三重県津市阿漕浦	現生貝類 (IH)
5月11日	京田辺	(S)	9月28, 29日	岐阜県上宝村穂高岳周辺	第四紀深成岩類・火山岩類 (IY, 塚腰)
5月14日	犬鳴谷	(F)	11月21日	徳島市吉野川河口,	現生貝類 (IH)
7月4日	宮崎県綾町	(S)	11月26, 28日	長崎県伊王島,	古第三紀貝化石 (IH)
7月17日	泉大津・堺市金岡	(F)	11月27日	長崎県諫早干拓地,	現生貝類遺骸 (IH)
7月20日～21日	島根県太田市三瓶山	(S)	12月1, 20日	奈良県都祁村吐山,	山辺層群貝化石 (IH)
7月25日	東住吉区今川	(F)	1999年		
8月11日	猪名川町杉生	(F)	1月21日	京都府和束町,	現生カワニナ (IH)
8月21日	淀川城北地区	(F)	1月21日・2月21日	京都府法花寺野鉱山跡	マンガン鉱物他 (IH, 川端)
8月25日	三重県上野市	(S)			
9月18日	岬町	(F)			
9月25日	河内長野市錦織公園	(S)			
10月5日	三重県上野市	(S)			
12月10日	安曇川デルタ	(F)			
■地史研究室 担当者名 樽野…T, 川端…K, 塚腰…G, 石井久夫…I, と略記する。					
■植物研究室 標本の採集					
6月8日	高槻市出灰	古生代コケムシ化石など (K)			

1月30日 東京都江戸市 上総層群貝化石 (IH)
 2月21日 大阪市東住吉区長居公園
 火山灰分析用試料 (IY)
 3月2日～4日 鹿児島県志布志町・大根占町・国分市
 九州南部起源の火山砕屑物 (IY)

IV. 業務委託による収集

業務名：大阪湾岸壁付着生物採集・検定業務

採集水域・場所：大阪湾内5ヵ所（大阪北港，泉大津，淡輪，西宮，明石）

採集時期：平成10年8月

方法：

(1) 採集

小形船舶を用い，スキューバ潜水により作業をする。
 1ヵ所について基準海面から0m，2mおよび4mの
 各水深について3個の方形枠（25×25cm）を設置し，
 枠内の全生物を採集し，フォルマリンで固定して試料
 とする。同時に付近の主要な生物を目視同定し，記録
 する。

(2) 検定

持ち帰った試料を同定し，種毎に個体数・湿重量を
 測定する

V. 現有資料数

■動物研究室（平成10年度末）

海綿動物	113点
腔腸動物・有櫛動物	647点
扁形・紐形動物	258点
触手動物	128点
環形動物	4,840点
甲殻類	8,264点
軟体動物	21,710点
棘皮動物	2,109点
原索動物	416点
その他無脊椎動物	710点
魚類	11,542点
両生類	19,932点
爬虫類	4,098点
鳥類・哺乳類	3,198点
(計)	77,965点

■昆虫研究室（未登録標本を含む）

標本総計 563,913点（平成10年度末の標本数）

（日本産445,664点，外国産118,249点）

内訳

日本産昆虫	平成10年度末
Plecoptera カワゲラ目	432
Ephemeroptera カゲロウ目	130
Odonata トンボ目	17,556
Mantodea カマキリ目	324
Orthoptera 直翅目	9,509
Phasmida ナナフシ目	242
Dermaptera ハサミムシ目	424
Grylloblattodea ガロアムシ目	21
Blattodea ゴキブリ目	408
Isoptera シロアリ目	86
Embioptera シロアリモドキ目	25
Psocoptera チャタテムシ目	334
Thysanoptera アザミウマ目	24
Heteroptera 異翅類（カメムシなど）	25,704
Homoptera 同翅類（セミなど）	13,299
Neuroptera 脈翅目	1,413
Mecoptera シリアゲムシ目	1,640
Trichoptera トビケラ目	2,130
Heterocera 蛾（ガ）	30,242
Rhopalocera 蝶（チョウ）	35,404
Coleoptera 甲虫目	235,520
Diptera ハエ目	18,046
Hymenoptera ハチ目	36,475
その他（各目）	16,276
(計)	445,664

外国産昆虫	
蝶（チョウ）	42,601
蛾（ガ）	4,217
膜翅目（ハチ）	4,596
双翅目（ハエ）	486
甲虫	28,525
脈翅目（ウスバカゲロウなど）	44
同翅類（セミなど）	5,748

異翅類（カメムシなど）	1,252
直翅型昆虫	1,622
トンボ	1,218
カワゲラ	64
その他（各目）	3,088
南太平洋学術調査コレクション	4,700
田中竜三氏コレクション（日本産含む）	12,439
韓国産昆虫コレクション（西川・桂・富永氏）	1,506
アフガニスタンの昆虫（有田 豊氏他）	6,143
（計）	118,249

■植物研究室（平成10年度末，未登録標本を含む）

種子・シダ植物サク葉標本	193,340
蘚類標本	34,730
苔類標本	23,000
地衣類標本	353
海藻標本	12,647
菌類標本	1,215
木材標本	1,772
木材プレパラート	1,283
果実標本	6,071
（計）	274,361

■地史研究室（登録済標本数）

平成10年度末

岩石	1,270
鉱物	2,500
古生代無脊椎動物化石	1,305
中生代無脊椎動物化石	2,500
第三紀無脊椎動物化石	1,017
有孔虫等微化石プレパラート	17,841
放散虫化石	135
脊椎動物化石	1,508
古生代植物化石	51
中生代植物化石	203
第三紀植物化石	1,410
（計）	29,740

■第四紀研究室（登録済標本数）

平成10年度末

人類遺物	29 点
第四紀植物化石	17,770 点
現生花粉プレパラート	2,114 点
現生花粉	941（種）
現生シダ植物孢子	362（種）
無脊椎動物化石	3,559 点
大阪市内ボーリング資料	862（件）
（計）	25,637 点（件・種）

VI. 収蔵資料目録の発行 ＜担当者；那須＞

■大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第31集

那須孝悌（文）・樽野博幸（写真図版）

コダイアマモの化石 — 三木茂教授コレクション —

故三木茂教授が研究資料として収集したコダイアマモ化石が、当館に寄贈され保管されている。111点の標本について、裏面に残る注記を可能な限り読みとり、現在の形状と共に記載した。また、主要標本の現状写真を掲載すると共に、郡場寛教授と連名の原記載論文（1931）および再記載論文（1958）の写真図版も収録した。

コダイアマモ化石に関する研究史と課題

（那須孝悌）p. 1～5.

三木茂教授収集のコダイアマモ化石標本 p. 6～11.

B 5 判，10 図版，11 頁，平成11年 3 月31日発行。

VII. 自然史図書の収集

当館の資料収集活動の一環として、自然史科学に関係した図書の収集を行っている。その大部分は当館発行物との交換で収集しているものであるが、個人・団体・自治体等からの各種報告書等の寄贈や、購入によるものもある。

普及書的な図書や図鑑類は主として普及センターに配置され、入館者の閲覧と、市民からの各種の相談や質問に使用されている。専門図書は主として各研究室に、調査報告書・逐次刊行物は書庫に配置されている。また各種地図の収集も行っている。これら図書の閲覧や利用の希望が近年増加してきているが、司書が配置されていないため、市民

が直接利用できる体制はとれていない。また、コピーサービスについても行えていない。

平成10年度(1998年度)は、平成9年度につづき、図書収集事業についていくつかの改善をおこなった。平成9年度に開始した交換・寄贈による逐次刊行物と寄贈・購入書籍のコンピュータへのデータ入力、新しく受け入れたものについて引き続きおこなっている。平成9年度は国内外の交換先機関にたいして、研究報告、自然史研究、収蔵資料目録のバックナンバーの希望調査をおこなったが、平成10年度は国内の交換先にたいして展示解説、特別展解説書、ミニガイドシリーズなどの希望調査をおこなった。その結果、56件の希望があり、送付した。平行して、書庫の在庫整理をおこなった。

平成10年度中に受け入れ、データ入力をおこなった電子出版物を含む図書は、購入55、交換7、寄贈470、その他53の585部で、平成10年度末現在の受入済み収蔵数は、8,821部、交換・寄贈によって受け入れた逐次刊行物と調査報告書は平成10年度に7,049冊、平成10年度末現在の累計116,406冊である。

1. 個人・機関からの受贈(交換分は除く、敬称略)

●個人(順不同): 青木典司、稲田孝司、枅田 長、宮道慎二、富樫一、三浦和彦、春成秀爾(直良信夫論文集刊行会)、大谷卓也、粉川昭平、井上 清、柿原申人、二宗誠治、西田 誠、須田孫七、谷岡壽和子、引田雅生、吉岡一郎、宮武頼夫および館員(金沢 至、初宿成彦、波戸岡清峰、佐久間大輔、藤井伸二)

●民間団体、出版社、企業など: 小学館、白水社、有隣堂、横田書店、PHP研究所、淡水魚保護協会、地学団体研究会大阪支部、石友会、シェアリングアース協会、(財)新映像産業推進センター映像情報化プロジェクト室、埼玉昆虫談話会

●政府機関及び自治体など: 科学技術広報財団、科学技術庁、(財)科学技術振興財団、千葉県、動力炉・核燃料開発事業団東濃地科学センター

2. 購入等によるもの

■図書購入費による購入

平成10年度	55 冊	971,615 円
--------	------	-----------

■消耗品費による購入

国内雑誌	科学など	8 誌	205,096 円
外国雑誌	Copeia など	8 誌	151,165 円

[平成10年度購入雑誌]

国内: 科学・遺伝・生物科学・海洋と生物・月刊地球・月刊海洋・岩鉱・地球惑星科学入門

外国: Copeia・Curator・Taxon・Evolution・Pacific Science・Systematic Biology・Geological Magazine・Journal of Paleontology.

■学会への加入による収集

16学会へ団体会員として加入し、会誌を収集した。学会名は、以下の通りである。この他にも、多くの入会すべき学会が国内・外に多数あるが、予算などの状況から入会できていないのが現状である。

日本応用動物昆虫学会(日本応用動物昆虫学会誌,

Applied Entomology and Zoology)

日本動物学会(動物学雑誌)

日本生態学会(日本生態学会誌)

日本生物地理学会(日本生物地理学会会報)

日本衛生動物学会(衛生動物)

日本魚類学会(魚類学雑誌)

日本植物学会(Journal of Plant Research)

日本遺伝学会(遺伝学雑誌)

日本藻類学会(藻類)

日本陸水学会(陸水学雑誌)

日本地質学会(地質学雑誌)

日本第四紀学会(第四紀研究)

日本古生物学会(Paleontological Research)

日本地学研究会(地学研究)

日本博物館協会(博物館研究)

全国科学博物館協議会(全科協ニュース)

国際トンボ学会(ODONATOLOGICA)

この他、交換により、会誌を受領している学会も多い。

3. 文献交換状況

当館発行の研究報告・自然史研究・収蔵資料目録・館報・展示解説および当館友の会発行(当館編集)Nature Studyと交換に、国内国外の研究・教育機関と文献交換を行なった。また、各種自治体・団体・個人から調査報告書等の寄贈を受けた。平成10年度に交換・寄贈により入手した逐次刊行物・調査報告書等は、7,049冊で、前年度より3,000冊近く多く受け入れた。

 ■研究報告など出版物の配布

	国 内		国 外	
研究報告52号	467カ所	482冊	458カ所	461冊
自然史研究 2 巻14号	342カ所	348冊	189カ所	192冊
収蔵資料目録	239ヶ所	253冊	39ヶ所	40冊
展示解説（特別展解説書とミニガイド）				
	262ヶ所	280冊	0ヶ所	
館報	708カ所	765冊	10カ所	10冊

いずれも第1回配布のみ

通送便の複数部数は加えていない（9冊とした）

普及教育事業

I. 各種普及教育活動

多様な博物館利用者とその要望に応えるため、次のような各種の普及行事を行なっている。参加者のレベル、興味分野、意識などに応じていくつかのシリーズを設けている。シリーズの細分化は、長年にわたる当館の普及活動の取り組みのなかで生み出されてきたものである。現在も積極的に行事開発を試みており、補助スタッフの研修制度は普及事業の新しい展開となりつつある。学校教育での第2、第4土曜休日制の本格導入にともない、土曜日に各種行事を開催するだけでなく、対象者を小中学生に絞った行事も行なっている。

観察会のテーマの多様化と参加者数の増加にともない、館外からも講師を招いている（**印）。また、市民の社会奉仕活動への参加意欲を満たし、よりきめの細かい普及教育活動を行なうために、ボランティアによる補助スタッフを野外行事等に導入した（*印）。補助スタッフ制度は、下見を兼ねた事前研修や学習会等をそれぞれの行事について行なうのが特徴で、補助スタッフにとっては少人数制の中身の濃い学習の場として重宝されているようである。各種行事はこうした多数の方々の理解と協力によって支えられている。

以下に各行事の記録を、行事名、実施場所、実施月日、参加者数の順に略記する。

■やさしい自然かんさつ会

これまでに自然史博物館の行事に参加したことのない人を主な対象に、自然のおもしろさを野外で直接体験してもらうことによって自然に親しむ糸口をつかんでもらうことをねらいとした行事。観察会の中では入門編で、初級者を対象としている。独自の広報用チラシを作成し、区役所、社会教育施設および当館内で配布し、野外活動に参加したことのない新しい層の開拓に努めた。

昨年同様、大きく定員を超過している状態が続いている。同一行事を複数回開催するなどの対策を講じている。また、補助スタッフの導入により、安全確保・教育効果の面を確保しながらも大人数での行事を行うことが可能になっている。

「レンゲ畑のいきもの」*、** 高槻市三島江・御所

4月25日（土）申込516名（当選297名）参加者138名
「海べのしぜん」* 長崎海岸

4月26日 申込851名（当選240名）参加者168名

「テントウムシ」*

6月14日 申込262名 雨天中止

「チョウとガの子どもさがし」*

9月13日 申込174名（当選105名）参加者69名

「木の実あそび」* 能勢

10月25日 申込245名（当選186名）参加者79名

「化石さがし1」 泉佐野

11月29日 申込374名（当選121名）参加者88名

「化石さがし2」 泉佐野

3月7日 申込123名 参加者54名

6テーマ7回実施 延べ参加者数596名

■地域自然誌シリーズ

大阪をとりまく地域を歩きながら、その地域の自然をさまざまな分野の観点から観察し、自然の特徴とそこを利用する人との関わりについて総合的に考えることを目的とした行事。シリーズのなかでは中・上級向け。

今年度は長居公園・泉南・北摂・河内・淀川などの地域別シリーズに再編し、多数開催した。行事で利用した各観察地は、計画中の「地域自然誌展示室」で自然観察ポイントとして紹介していく予定である。

[長居公園]

（1. は'97年度末に行った「根の観察とセミの幼虫さがし」）

2. 「春の渡り鳥の観察会」* 長居植物園

4月19日 申込86名（当選63名）参加者44名

3. 「クマバチ」*、** 長居植物園

5月17日 申込58名 参加者43名

4. 「プールの昆虫」** 長居プール

5月23日（土）申込123名 参加者85名

5. 「ダンゴムシ・ワラジムシしらべ」* 長居植物園

6月21日、7月12日 申込27名 参加者24名

6. 「長居公園にセミは何匹いるか？」* 長居公園

7月26日 申込41名 参加者35名

8月2日 申込39名 参加者32名

7. 「秋の渡り鳥の観察会」* 長居植物園

10月18日 申込54名 参加者37名

8. 「冬鳥の観察会」* 長居植物園

2月28日 申込99名（当選62名）参加者40名

[河内]

1. 「二上山」二上山駅～太子駅

7月5日 申込104名、参加者54名

2. 「社寺林のキノコ」* 河内長野市天見

7月19日 申込112名(当選72名) 参加者56名

〔北摂〕

1. 「出灰」高槻市出灰

6月7日 申込65名 参加者41名

2. 「ボンボン山と本山寺」* 京都市西京区善峰寺～

高槻市神峰山口

7月5日 申込37名 参加者24名

〔泉南〕

1. 「男里川河口」* 泉南市樽井

6月13日 申込88名 雨天中止

2. 「雑木林のキノコ」貝塚市水間公園

9月27日 申込143名(当選90名) 雨天中止

3. 「樫井川河口」泉南市樫井川河口

12月6日 申込43名 参加者32名

〔淀川〕

1. 「豊里」大阪市東淀川区豊里

8月22日(土) 申込63名 参加者38名

2. 「河口干潟」* 大阪市東淀川区西中島南方

9月20日 申込93名 参加者66名

「今川のオニバス」大阪市東住吉区今川

9月26日(土) 申込22名 参加者14名

延べ参加者数665名

■テーマ別自然観察会

自然の中の諸事象からテーマと対象をしばって観察することで、自然に対する理解をより深めようとする行事。学芸員の専門分野を基礎にしたテーマも多く、さらに掘り下げた学習機会の提供も可能にしている。今年度は多くを「地域自然誌シリーズ」の中に組み込んで行った結果1行事のみの開催となった。

「段丘」大阪市天王寺区

12月13日 申込29人 参加者21人

■野外実習

野外において、自然観察や調査のしかたの実際を学ぶ行事。しばらく行っていなかったが、1997年度に復活した。1998年に開催する特別展「都市の自然」に向け、大阪の都市部の公園で繁殖する鳥について調査を行った。

「公園で繁殖する鳥をしらべよう1」豊中市服部緑地

5月24日(日) 申込23名 参加者19名

「公園で繁殖する鳥をしらべよう2」堺市大泉緑地

6月27日(土) 申込48名(当選26名) 参加者14名

■室内実習

生物・化石などを材料に、博物館に備え付けの研究機器を活用しながら、野外では行えない分析的な観察・実習を体験することにより、自然に対する理解をより深める行事。博物館設備の関係から希望者の多い場合は抽選せざるを得なかった。熱心な若年層の参加も見られ、より高いレベルの体験学習の場として機能している。シリーズのなかでは上級向け。

「落ち葉と葉の化石」長居植物園・実習室

11月1日 申込13名 参加者11名

「キャツリグサ科の解剖」実習室

12月12日(土) 申込10名 参加者10名

■長居植物園案内

植物園案内では現在、携帯型実体顕微鏡による観察を行っているが、毎回80名をこえる参加者にこのような観察を手引きするのはもはや補助スタッフなしには遂行し得ない。また補助スタッフにより、自主的に行事での学芸員の解説を書き留めた記録が発行され、参加者の学習効果を高めることができた。

4月4日(土)* 85名

5月2日(土)* 80名

6月6日(土)* 110名

7月4日(土)* 61名

8月1日(土)* 58名

9月5日(土)* 63名

10月3日(土)* 75名

11月7日(土)* 72名

12月5日(土)* 75名

1月16日(土)* 108名

2月6日(土)* 74名

3月6日(土)* 101名

延べ参加者数962名

■科学映画会

毎月第2土曜(午後2時)、翌日の日曜(午前11時・午後2時)実施で、1プログラムにつき合計3回を当館講堂にて上映。土曜日の実施は1993年よりはじめた。上映とあわせて当館学芸員が簡単な解説を行なっている。今年度は

普及教育事業

特別展期間中の科学映画会には当館製作のビデオ「都市の自然」の上映も行った。

4月11, 12日	たいせき岩のできるまで	170名
5月9, 10日	人と環境—生きもののつながりあい	105名
6月13, 14日	サケよ帰れ ふるさとへ	176名
7月11, 12日	ファーブル昆虫記の世界 —習性と本能—	201名
8月8, 9日	琵琶湖 水辺の生き物	221名
9月12, 13日	淀川の自然	140名
10月10, 11日	水中の植物・陸上の植物 —シダ植物の生活を通して	229名
11月14, 15日	奄美の森の動物たち —自然をさぐる—	150名
12月12, 13日	富士山麓 野鳥たちの詩	95名
1月9, 10日	東洋のガラパゴス	179名
2月13, 14日	粘菌の行動と分化	180名
3月13, 14日	雷鳥の四季	161名
		延べ観覧者数 2,007名

■自然史講座

当館学芸員が自らの調査・研究の成果をもとに自然史科学に関する話題を市民に普及する講演会。当館集会室で毎月第3土曜日の午後3時～4時30分に開催した。近年は参加者が増加し、自然に関する学習機会の需要が高まっているように思える。集会室の定員（40～50名）では充分に対応できないほど多数の参加があることも珍しくない。

4月11日	日本のマンモス	樽野博幸	43名
5月9日	海をわたる貝	石井久夫	15名
6月13日	被子植物と裸子植物	岡本素治	38名
7月11日	やさしい魚のはなし2	波戸岡清峰	32名
8月8日	大阪市内で繁殖する鳥	和田 岳	56名
9月12日	大阪の都市昆虫	初宿成彦	69名
10月10日	キノコの観察と保管	佐久間大輔	71名
11月14日	『レッドデータブック近畿』が語るもの	藤井伸二	40名
12月12日	西日本の干潟とそこに棲むさまざまな底生動物	山西良平	55名
1月9日	中生代の植物化石	塚腰 実	45名
2月13日	世界—新しい花崗岩を取りに行った話	石井陽子	68名

3月13日 都市部のミノムシ界とその異変

金沢 至 56名

延べ参加者数 540名

■標本同定会

子どもたちが夏休みに採集して作成した標本について、その名前を教える行事。生物の名前を知ることにより、自然をより身近なものとしてとらえ、探求心を育てることをねらいとしている。館外から多数の専門家の協力を得て、毎年8月下旬に実施している。1998年は8月30日（日）に実施した。昨年度に比べて件数で25件、参加者数で約70名増加した。岩石・鉱物の同定依頼が多かったことと、昆虫分野の着実な伸びが目立った。

同定件数

昆虫（クモなどを含む）	39件
植物（菌類を含む）	30件
貝・その他の動物	20件
岩石・鉱物	21件
化石	8件

計125件（参加者245名）

■生涯学習フェスティバル

第5回大阪市生涯学習フェスティバルが大阪市生涯学習フェスティバル実行委員会主催（後援大阪市教育委員会他）により11月14日、15日の両日に大阪市の中之島公園で開催された。教育委員会の依頼により、当館は14日に当館の普及活動と友の会をPRするためのパネル展示を行った。同時に普及図書の販売も行った。また、中之島公園の植物と中央公会堂の石材を題材とする観察会を行った。観察会の参加者は25名。

■講演会

1. 特別展普及講演会「街のいきもの 西 vs 東」

日時：8月23日（日）

会場：自然史博物館 講堂

演題・講師：

「東京湾の生物とその暮らし」

風呂田利夫氏（東邦大・理・海洋生物）

「関東地方の都市部の鳥とセミと鳴く虫と」

浜口哲一氏（平塚市博物館）

「都市緑地管理と生物」

山本紀久氏（愛植物設計事務所）

参加者：76名

2. シンポジウム「21世紀に伝える近畿の植物と自然環境 —レッドデータブック近畿2000年版をめざして—」

(主催：レッドデータブック近畿研究会)

共催：大阪市立自然史博物館、大阪市立大学理学部付属植物園、兵庫県立人と自然の博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、和歌山県立自然博物館)

日時：11月29日(日) 会場：自然史博物館 講堂

演題・講師：

ごあいさつ「レッドデータブック編集の意図」

村田 源氏(元京都大学)

「絶滅危惧種の現状 — 水辺の植物を中心に」

角野康郎氏(神戸大学理学部)

「植物保護と環境—保全へのアプローチ」

梅原 徹氏(環境設計株式会社)

パネルディスカッション

「レッドデータブックの果たすべき役割と方向性」

協力：関西自然保護機構、植物分類地理学会

参加者：229名

3. 地球科学講演会(共催：地学団体研究会大阪支部)

「大阪平野の200万年

—地層から自然環境の変化を読む—」

日時：1999年2月7日(日)

講師：吉川周作氏(大阪市立大学理学部地球学教室)

会場：自然史博物館 講堂

参加者：249名

■ドキドキ子ども自然史ウォッチング

社会教育施設の無料解放により、博物館の利用機会の増した小中学生を対象に1995年から実施している。展示だけでなく、研究施設・収蔵施設などを含めた館内見学や実習により、博物館と自然史科学に親しみきっかけを作ることが目的としている。冬の小学生向けの「博物館たんけんコース」、夏の中学生向けの「学芸員体験コース」いずれも大阪市内の小中学校全生徒に配付される広報誌「タッチ」に掲載され、幅広い応募がある。収蔵施設などの見学の安全確保、実習の進行などには補助スタッフの協力におうところが大きい。

1. 「博物館たんけんコース」*

裏方(実験室や収蔵庫など)を中心とする館内見学とスクラッチカードによる展示見学。ふだんは見ることのできない博物館の施設を学芸員の具体的な仕事内容とともに紹介する。博物館を身近で親しみやすいも

のとして感じ、自然史についての興味を育てることをねらいとしている。1月9日、10日の2日間に渡って3回実施した

申込総数163名

第1回 1月9日(午前) 参加者 43名

第2回 1月9日(午後) 参加者 48名

第3回 1月10日(午後) 参加者 51名

延べ参加者数 142

2. 学芸員体験コース(中学生向け)*

3日間連続の実習。オリエンテーションと裏方(実験室や収蔵庫など)を中心とする館内見学ののち、学芸員があらかじめ用意した課題(オニバス・ハチ・カメの3課題から選択)に基づき、学芸員と補助スタッフの指導のもと長居公園周辺で野外調査を行い、この結果をまとめ、展示として作成した。

自分の目と手で調べた調査を展示として作成、発表することで、自然に対する探究心と科学的な観察力を育てることをねらいとしている。また学芸員の仕事と博物館の活動を体験的に理解してもらうプログラムとしても位置付けている。この行事の様子は友の会の機関誌 Nature Study No.46 の9, 10, 11月号にも掲載されている。

8月18~20日 申込26名(当選24名) 参加者23名

■補助スタッフ研修

1995年度から友の会による補助スタッフ制度を導入した。補助スタッフ事業の運営は当館の事業の最もよく理解者である「友の会」に委託し、会員より募集を行なっている。行事実施に必要な知識・技術会得のために、行事のテーマと内容に応じて当館学芸員による事前研修、勉強会、打ち合わせ、企画会議、事後研修等を行なった。補助スタッフは、こうした研修を通して自身の学習に積極的に取り組み、その成果を社会に還元しようとする方たちであり、当館の普及事業の一翼を支えている。今年度は「地域自然誌シリーズ」の充実のため、個別の行事での補助スタッフ採用が増えている。行事内容に即した多様な興味を反映し、補助スタッフ参加者も広範になっている。このことは、補助スタッフ研修が「魅力ある学習の機会」として認知されていることを示し、この意味でも改めてこの事業が当館の普及活動の大きな柱となっていることが示される。1998年度は、研修を延べ53回開催し、これを受講した人たちは延べ428名に達する。行事と合わせると延べ71回、543名である。こ

普及教育事業

のことからも研修制度は当博物館の普及教育プログラムとして重要な位置を占めていることがわかる。

以下に補助スタッフ研修について、行事名（地域自然誌のシリーズ名は省略した）、研修の開催日、場所、受講人数の順に略記する。なお、各行事の実施日については上述の普及行事の項を参照。

レンゲ畑のいきもの	4月24日	当館	1名
海べのしぜん	4月11日	岬公園	12名
春の渡り鳥	4月12日	当館	15名
クマバチ	5月16日	長居植物園	3名
男里川	5月30日	樽井	6名
テントウムシ	6月7日	妙見口	12名
ダンゴムシ	6月20日	長居植物園	5名
植物園案内	7月4日	長居植物園	1名
社寺林のキノコ	7月18日	河内長野市天見	6名
セミのマーキング	7月20日	大阪市内	8名
河口干潟	9月5日	淀川区	1名
チョウの子どもさがし	9月12日		4名
秋の渡り鳥	10月11日	長居植物園	9名
木の実あそび	10月24日	当館	2名
ボンボン山と本山寺	10月26日	東向日	4名
ドキドキ探検コース	12月27日	当館	10名
ドキドキ体験コース	8月2日	当館	7名
冬鳥の観察会	2月21日	長居植物園	9名
植物園案内	4月4日	長居植物園	8名
植物園案内	5月2日	長居植物園	8名
植物園案内	6月6日	長居植物園	8名
植物園案内	7月4日	長居植物園	6名
植物園案内	8月1日	長居植物園	7名
植物園案内	9月5日	長居植物園	6名
植物園案内	10月3日	長居植物園	7名
植物園案内	11月7日	長居植物園	7名
植物園案内	12月5日	長居植物園	3名
植物園案内	1月16日	長居植物園	9名
植物園案内	2月6日	長居植物園	7名
植物園案内	3月6日	長居植物園	8名

■インターネットを利用した普及活動

博物館では平成9年度からインターネットシステムを導入し、研究活動に利用すると共にホームページなどを利用した市民への情報発信と学習機会の提供を行っている。ホームページは平成9年7月の開設以来、その内容は飛躍的に

拡充され、また市民からの関心も増している。開設以来10年度末までに延べ33,000人を越える閲覧者があり、市民からの質問に対する情報提供や標本資料の公開なども行われている。平成10年度からは電子メールを利用した自然史情報の交換の場としてメーリングリスト [omnh] を開設した。平成11年3月31日現在で118名の参加者が登録され、様々な自然観察の報告や質問などに活発に利用されている。開設から約4ヶ月で、748通のメールがやり取りされている。

II. 大阪市立自然史博物館友の会

自然史博物館友の会は、博物館を積極的に利用して、自然に親しみ、学習しようとする人たちの会である。友の会の会計年度は1～12月で、博物館とは独立した組織として運営されている。

友の会では、博物館主催の行事とは別に、計13回の友の会主催行事を実施し、延べ1,062名の会員とその家族が参加した。友の会行事では、自然観察と同時に会員相互の交流・会員と評議員や学芸員との交流が行われている。また、「セミのぬけがらしらべ」では、都市公園におけるセミの発生について継続データの収集を行っている。

■庶務

1. 1998年度の会員数は1,922名（1年会員1,742名、半年会員179名、賛助会員1名）。前年度は1,834名（1年会員1,760名、半年会員73名、賛助会員1名）で、大きく増加した。とりわけ半年会員の増加が目立ち、新しく製作した勧誘のためのリーフレットによる効果と思われる。

1998年度賛助会員：（株）新興出版社啓林館

2. 5回の評議員会を開き、会の事業・庶務等について審議した。

■役員

会 長：粉川昭平

副会長：西川喜朗・那須孝悌

評議員：道盛正樹（庶務）、田代 貢（庶務）、浦野信孝（庶務）、白木江都子（事業）、春沢圭太郎（事業）、桂孝次郎（事業）、細井孝昭（事業）、鍋島靖信（事業）、村井貴史（事業）、杉浦真治（事業）、左木山祝一（会計）、花岡皆子（会計）、山下裕子、梅原 徹、六車恭子、堀田 満

会計監査：上田俊穂・津田 滋

■事務職員

玄甫貴子（大阪市教育振興公社嘱託職員）

■事業

1. 行事

13回の行事を実施し（計画16回、中止3回）、延べ1,062名の会員とその家族が参加した。

(1) 総会 1月25日（日） 自然史博物館 168名

(2) 合宿「淡路島」 兵庫県淡路島方面
5月9日（土）～10日（日） 56名

(3) 第10回昆虫採集入門講座
兵庫県猪名川町・奥猪名健康の郷
8月11日（火）～12日（水） 50名

(4) セミのぬけがらしらべ・韮公園
9月6日（日） 61名

(5) 秋のつどい「大阪湾まるとトレトレ底びき網」
11月15日（日） 365名

(6) 月例ハイキング
（3月まで第1日曜日、4月以降第3日曜日）
1月4日 妙見山 雨天中止
2月1日 須磨水族園 45名
3月2日 金胎寺山 44名
4月19日 深泥池 42名
5月17日 竜仙峡・竜王山 33名
6月21日 千早口から石仏 雨天中止
7月19日 芹川 43名
8月16日 比良山・琵琶湖パレイ 44名
9月20日 穂谷 47名
10月18日 大野山 雨天中止
12月20日 湖南アルプス・笹間ヶ岳 42名

2. 刊行・製作など

(1) Nature Study 誌44巻1号（通巻524号）～12号（通巻535号）を発行。このうち1月号と7月号の表紙をカラー印刷とした。

(2) オリジナルパンダナ（カニとドングリの2種類）の製作と鳥の絵はがき、ひも付きボールペンの製作。

(3) ミニガイド「大阪の街路樹」と自然観察地図（廉価版）、フィールドノートの増刷。

(4) 入会勧誘チラシの製作・配布。

3. その他の事業

(1) 大阪市などが共催する「第7回大阪生涯学習フェスティバル」に参加（11月14日、中之島）

(2) 博物館のボランティア推進事業の委託を受け、会員から募集した補助スタッフ・リーダーにより、博物館行事の運営補助を行い、博物館事業に協力した（詳細は以下）。

■1998年度補助スタッフ事業

補助スタッフ事業は、多くの会員の協力によって運営されている。会員の方々に謝意を表するとともに、以下に行事名、行事実施日と補助スタッフ人数の順に列記する。（研修実施日については30ページを参照）

やさしい自然かんさつ会

「レンゲ畑のいきもの」	4月25日	1名
「海べのしぜん」	4月26日	10名
「チョウの子どもさがし」	9月13日	4名
「木の実あそび」	10月25日	2名

地域自然誌シリーズ

「春の渡り鳥」	4月19日	8名
「クマバチ」	5月17日	3名
「ダンゴムシ」	6月21日	3名
「ボンボン山と本山寺」	11月1日	5名
「社寺林のキノコ」	7月19日	6名
「河口干潟」	9月20日	1名
「秋の渡り鳥」	10月18日	4名
「冬鳥」	2月28日	9名

テーマ別自然観察会

「セミのマーキング1」	7月26日	10名
「セミのマーキング2」	8月2日	8名
「今川のオニバス」	9月26日	3名

植物園案内

4月	4月4日	8名
5月	5月2日	8名
6月	6月6日	8名
7月	7月4日	6名
8月	8月1日	7名
9月	9月5日	6名
10月	10月3日	7名
11月	11月7日	7名
12月	12月5日	3名
1月	1月16日	9名
2月	2月6日	7名
3月	3月6日	8名

ドキドキ子ども自然史ウォッチング

「学芸員体験コース」 8月18日 6名

8月19日 7名

8月20日 7名

ドキドキ子ども自然史ウォッチング

「博物館たんけんコース」 1月9日 7名

1月10日 9名

Ⅲ. 博物館実習生の受け入れ

本年度は下記の13名の学生を受け入れた。

坂田陽一（京都府立大学），鈴木佐知子（九州大学），奥村友香（九州東海大学），小笠原孝治（九州東海大学），今里美加（宝塚造形芸術大学），三上禎次（京都教育大学），森真宏（京都教育大学），西村一平（京都教育大学），光岡佳納子（滋賀県立大学），牧靖和（大阪学院大学），藤井健（追手門学院大学），長尾樹里（追手門学院大学），俵毅（追手門学院大学）。

平成10年度（1998年度）普及行事、特別展、特別陳列、友の会行事一覧表

行事月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
やさしい自然 かんさつ会	25(出)レンガ畑 26. 海べの しぜん		14. テントウ ムシ			13. チョウト ガの子とも さがし	25. 木の実	29. 化石さが し1				7. 化石さが し2
地域自然誌 シリーズ	19. 長居2 (春の渡り鳥 の観察会) 23(出)長居4 (ブールの 尻尾) (長居1は 根っこ掘り)	17. 長居3 (クマバチ) 23(出)長居4 (ブールの 尻尾)	7. 北摂1 (出穴) 13. 泉南1 (男里川 河口) 21. 長居5 (ダンゴ ムシ)	5. 河内1 (二上山) 19. 泉南2 (社寺林の キノコ) 26. 8/2 (セミは何匹 いるか?)	22(出)淀川1 (鶴里)	20. 淀川2 (河口干満) 26. 今川の オニバス 27. 泉南2 (雑木林の キノコ)	18. 長居7 (秋の渡り鳥 の観察会)	1. 北摂2 (ポンボ ン山)	6. 泉南3 (櫻井川 河口)		28. 泉南8 (冬の観 覧会)	
テーマ別 自然観察会									13. 成丘			
野外実習		24. 公園の 繁殖鳥1 (和田)	27(出)公園の 繁殖鳥2 (和田)									
室内実習								1. 植物化石	12. カヤツリ グサ科の 解剖			
植物園案内 (第一土曜)	4	2	6	4	1	5	3	7	5	16	6	6
自然史講座	11	9	13	11	8	12	10	14	12	9	13	13
科学映画会	11. 12	9. 10	13. 14	11. 12	8. 9	12. 13	10. 11	14. 15	12. 13	9. 10	13. 14	13. 14
特別行事						18~20. ドキドキ学芸 員体験コース 23. 特別公開 講演会 30. 標本同定 会		14. 生涯学習 フェスティ バル 29. シンポジ ウム「21世 紀に伝える 近畿の植物 と自然環境」		9~10. ドキドキ博物 館たんけんコー ス	7. 地球科学 講演会	
展 示	3/21←新収 資料展→5/31	1. ←特別展「都市の自然」→11.										
友の会	9. 10. 宿 合 (淡路島)				11. 12 昆虫合宿 (猪名川町)	6. セミぬけ さがし		15. 秋のつど い		31. 友の会 総会		
月例ハイ キング (第三日曜)	19. 深泥池	17. 竜山峡	21. 千早口 から石仏	19. 芦川	16. 琵琶湖 バレイ	20. 穂谷	18. 大野山		20. 湖南アル プス・笹 間ヶ岳	17. 妙見山	21. 蒲原	21. 生駒山

務

I. 沿革

昭和24年11月8日－自然科学博物館開設準備委員会設置

昭和25年4月1日－自然科学博物館費予算に計上

昭和25年11月10日－市立美術館 2 階廊下において展示開設

昭和27年4月17日－博物館相当施設に指定

昭和27年6月2日 大阪市立自然科学博物館条例および
規則制定

昭和27年7月10日—博物館法第10条により登録(第2号)

昭和27年10月1日－筒井嘉隆 館長に就任（39. 7. 4
退任）

昭和32年6月7日－市立美術館より西区鞆2丁目(元鞆
小学校校舎改造)に移転

昭和33年1月13日—開館

昭和34年 一新館建設について本市社会教育審議
会の意見具申

昭和39年 一日本育英会の第一種奨学金の返還を
免除される職を置く研究所に指定
(文部省)

昭和39年8月1日－筒井嘉隆 館長に就任（非常勤嘱託－
40. 7. 31 退任）

昭和40年8月1日—千地万造 館長に就任（58. 6. 1
退任）

昭和42年 一大阪市総合計画局“30年後の大阪の
将来計画”により長居公園内に新館
敷地確定

昭和44年8月 一新館建設のための基本構想審議委員
会組織

昭和45年 4 月 一 自然史博物館建設委員会組織

昭和47年1月21日—自然史博物館建設工事着工

昭和48年3月31日—自然史博物館建設工事竣工

昭和48年4月1日－旧館閉館

昭和48年7月 一新館へ移転開始並びにディスプレイ
契約締結(竣工49年3月)

昭和49年4月1日—大阪市自然史博物館条例公布

昭和49年4月26日—自然史博物館開館式举行

昭和49年4月27日—開館

昭和51年8月19日－文部省科学研究費補助金取扱規定第
2条第4号に規定する学術研究機関
として指定

昭和58年7月1日－千地万造 館長に就任（非常勤嘱託－
61. 3. 31 退任）

昭和59年 6 月 一常設展更新基本計画案策定

昭和60年3月 一常設展更新計畫書策定

昭和61年3月31日—常設展更新業務完成

昭和61年4月1日一新装開館

昭和61年4月1日－小川房人 館長に就任（兼務－2. 3. 31 定年退職）

昭和61年4月1日 一千地万造 顧問に就任（非常勤嘱託）
2. 3. 31 退任）

平成2年4月1日－小川房人 館長に就任（非常勤嘱託－
3. 3. 31 退任）

平成3年4月1日－小川房人 顧問に就任（非常勤嘱託－
5. 3. 31 退任）

柴田保彦 館長兼学芸課長に就任
(4. 3. 31 定年退職)

平成4年4月1日－柴田保彦 館長に就任（非常勤嘱託－
7. 3. 31 退任）

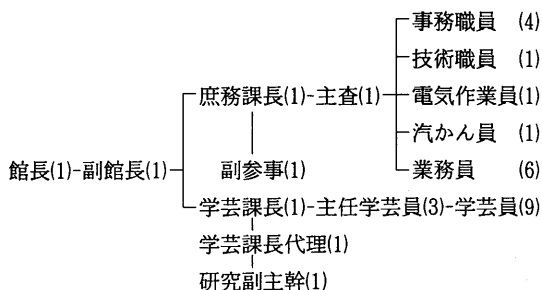
平成7年4月1日－宮武頼夫 館長に就任（9. 3. 31
定年退職）

平成9年4月1日－宮武頼夫 館長に就任（囑託－10. 3. 31 退任）

平成10年4月1日－那須孝悌 館長に就任

II. 組 織

■ 職員数（平成11年4月28日現在）計33名



■ 職員名簿（平成11年4月28日現在）

職 種	氏 名	職 種	氏 名
館 長	那須 孝悌	学芸課長	岡本 素治
副 館 長	嵯峨山淳二	学芸課長代理	樽野 博幸
庶務課長	小林 昌昭	研究副主幹	山西 良平
庶務課副専業主査	村上 達之	主任学芸員	石井 久夫
庶務課主査	村上美恵子	〃	金沢 至
事務職員	和田 健治	〃	川端 清司
〃	清水久美子	学芸員(植物)	藤井 伸二
〃	城山 裕司	学芸員(動物)	波戸岡清峰
〃	西田 良司	学芸員(地史)	塚腰 実
技術職員	谷 勝文	学芸員(昆虫)	初宿 成彦
汽かん員	川端 保夫	学芸員(動物)	和田 岳
電気作業員	平岡徳治郎	学芸員(植物)	佐久間大輔
業 務 員	高橋 明子	学芸員(四紀)	石井 陽子
〃	大西 妙子	学芸員補(四紀)	中条 武司
〃	古岡 武	学芸員補(昆虫)	松本吏樹郎
〃	泉澤 英男		
〃	田端 健二		
〃	木嶋 正弘		

普及事業全般について視察

9. 27 小松市立博物館専門委員及び職員25名視察
10. 9 水戸市立博物館自然担当職員収蔵庫の資料整理状況について視察
11. 7 長崎県たびら昆虫自然園職員展示・ソフト面等について視察
11. 2. 25 広島市立交通科学館管理係主事広報活動等について視察
3. 3 茨城県自然博物館ゾウ類化石等の調査の為職員2名視察
3. 6 広島市安佐動物公園企画広報係ボランティア活動等について視察
3. 11 名古屋市博物館職員施設のリニューアル計画等について視察
3. 17 愛知県農地林務部自然緑化課職員3名施設の活動・運営内容について視察
3. 26 群馬県立自然史博物館職員3名標本等の保管状況について視察

■ 人事異動

平成10年3月31日 島村 公久 定年退職
植田 耕作 定年退職
4月1日 小林 昌昭 スポーツ振興協会より転入
塩野 正雄 スポーツ振興協会へ転出
泉澤 英男 こども文化センターより転入
中条 武司 新規採用
松本吏樹郎 新規採用
4月14日 村上 達之 音楽団より転入
4月28日 宮元 宏 婦人会館へ転出
谷 勝文 こども文化センターより転入

Ⅲ. 庶務日誌

■ 平成10年度 博物館関係者来訪

10. 5. 22 島根県環境生活部景観自然課長他2名施設の概要・機能について視察
8. 13 JICA研修員（パキスタン国外7ヶ国）8名視察
8. 29 千葉県立中央博物館教育普及課研究員教育

IV. 決 算

■ 平成8年度～平成10年度（人件費を除く）

（単位 千円）

		事 項	平成8年度 決 算	平成9年度 決 算	平成10年度 決 算
歳入	第1部	入 館 料 ほ か	20,351	15,398	14,114
		雑収（展示解説等売却代）	2,041	1,526	1,549
		国 庫 補 助 金	0	0	0
	第 1 部 計		22,392	16,924	15,663
歳出	第1部	常 設 展 覧 事 業	2,826	2,674	5,148
		特 別 展 覧 事 業	6,427	6,107	5,581
		調 査 研 究 事 業	8,260	8,445	8,916
		資 料 収 集 保 管 事 業	4,642	4,041	4,768
		普 及 教 育 事 業	3,105	2,691	4,032
		充 実 活 性 化 事 業	3,120	3,317	3,447
		一 般 維 持 管 理 費	70,183	77,160	73,486
		小 計	98,563	104,435	105,378
	第2部	館 蔵 品 整 備 事 業	17,173	17,180	15,860
		研 究 機 器 整 備 事 業	3,586	3,948	2,680
		施 設 整 備 事 業	16,072	10,210	12,658
		自然史博物館増築・「(仮称)花と緑と自然の情報センター」建設※	13,500	260,000	818,956
		小 計	50,331	291,338	850,154
	第 1 部 ・ 第 2 部 合 計		148,894	395,773	955,532

（※8、9年度については展示更新を含む基本・実施設計費）

V. 入館者数（平成10年度）

区分 月	有 料				無 料							計	開館 日数
	個 人		団 体		団 体					個 人			
	大 人	高・大	大 人	高・大	中学生	小学生	幼・保 育園等	養護学 校・他	団 体 引率者	中学生 以 下	優 待・招 待・その他		
(10) 4	5,580	219	0	0	0	7,224	118	71	438	5,094	3,104	21,848	26
5	6,682	269	231	73	256	16,400	2,994	215	1,467	4,617	2,533	35,737	27
6	2,785	895	61	153	3	319	1,442	62	246	2,595	1,065	9,626	24
7	2,525	1,211	26	684	96	85	391	0	55	3,233	994	9,300	26
8	4,817	1,987	1	30	0	87	58	14	26	6,537	1,727	15,284	26
9	2,705	386	32	160	71	523	87	23	50	4,089	1,774	9,900	25
10	2,853	201	2	48	335	11,998	1,399	15	870	3,373	1,476	22,570	27
11	3,602	190	2	30	975	1,456	1,884	19	347	4,396	1,423	14,324	25
12	1,163	146	7	238	0	11	23	8	14	1,674	774	4,058	22
(11) 1	1,709	196	0	0	0	288	55	34	51	2,156	1,172	5,661	24
2	1,954	118	0	0	0	659	329	26	60	1,973	1,099	6,218	24
3	2,367	117	50	17	0	48	1,070	38	138	3,080	1,078	8,003	25
計	38,742	5,935	412	1,433	1,736	39,098	9,850	525	3,762	42,817	18,219	162,529	301

■団体観覧内訳（平成10年度）

区 分	市 内		市 外		計	
	件 数	人 数	件 数	人 数	件 数	人 数
幼 稚 園・保 育 所	107	6,102	63	3,748	170	9,850
小 学 校	138	12,182	287	26,916	425	39,098
中 学 校	12	1,157	5	579	17	1,736
養 護 学 校・他	23	363	15	162	38	525
団 体 引 率 者		1,739		2,023		3,762
高 校 生	1	92	11	1,008	12	1,100
大 学 生	2	153	3	180	5	333
一 般	5	242	4	170	9	412
計	288	22,030	388	34,786	676	56,816

■特別展入館者数

I (平成5年度～6年度)

種別 年度	個 人			団 体			無 料			合計	開催期間	日数	タ イ ト ル
	大人	高・大	小人	大人	高・大	小人	優待・招待	幼・保等	土日祝 小中生				
5	15,991	5,529	2,585	346	1,426	5,673	3,412	11,815	—	46,777	8. 7～10. 11	55	5億年の歴史 —近畿地方のおいたちを さぐる—
6	8,355	3,802	1,280	252	393	4,237	2,296	588	5,911	27,114	8. 6～10. 10	55	琵琶湖 —おいたちと生物—

II (平成7年度～10年度)

種別 年度	個 人				団 体			合計	開催期間	日数	タ イ ト ル
	大 人	高・大	優待・ 他無料	中学生 以下無料	大 人	高・大	中学生以 下他無料				
7	8,404	3,782	2,799	10,775	99	568	2,945	29,372	8. 5～10. 8	55	ゾウのきた道 —日本のゾウ化石—
8	12,343	3,210	3,795	12,951	216	192	2,499	35,206	8. 3～10. 6	56	昆虫の化石 —虫の4億年と人類—
9	7,690	3,140	3,057	8,043	18	293	1,163	23,404	8. 2～ 9. 28	50	海底の動物 —ベントスの世界—
10	8,821	2,449	4,314	12,312	48	195	6,219	34,358	8. 1～10. 11	61	都市の自然

VI. 施設の利用状況

■会議室 平成10年度 23件

年月日	団 体 名	人数
10・4・5	大阪地学同好石友会	10
4・11	近畿鳥類レッドデータブック研究会	20
4・18	レッドデータブック近畿経営委員会	10
5・23	大阪昆虫同好会	10
6・14	大阪鳥類研究グループ	15
6・18	大阪府植物レッドデータブック研究会	10
7・1	データベース会議	20
7・4	レッドデータブック近畿研究会	10
7・12	昆虫情報処理研究会	10
7・22	大阪府植物レッドデータブック研究会	10
9・12	レッドデータブック近畿研究会	10
10・25	大阪地学同好石友会	10

年月日	団 体 名	人数
11・24	関西トンボ談話会	10
11・29	レッドデータブック近畿研究会	10
12・12	近畿多毛類研究会	10
12・13	アサギマダラを調べる会	15
12・20	近畿植物同好会	10
11・1・17	近畿地学会	20
1・23	レピドプテリストセミナー	15
2・7	近畿植物同好会	15
2・13	大阪地学同好石友会	10
2・20	レッドデータブック近畿研究会	10
2・21	大阪昆虫同好会	15

■集会室 平成10年度 29件

年月日	団 体 名	人数
10・4・5	関西トンボ談話会	45
4・24	電気化学会懇談会	40
5・23	種子植物談話会	20
5・31	野尻湖ヴィーナスグループ	20
6・2	大阪府青少年リーダー研修会	30
6・14	大阪市東住吉区自然を考える会	30
6・27	種子植物談話会	20
7・2	大阪市立高等学校教育研究会	40
7・19	阪神わかやま野尻湖友の会	20
7・26	かもしかの会	30
8・15	日本鱗翅学会近畿支部例会	40
9・26	種子植物談話会	20
9・27	日本甲虫学会	40
10・22	大阪市立小・中学校事務研究会	50
10・25	ハネカクシ談話会関西支部	20
11・15	掘会（自然史研究団体）	30
11・28	種子植物談話会	20
11・29	双翅目談話会	20
12・5	日本昆虫学会近畿支部	30
12・6	関西トンボ談話会	30
12・13	日本甲虫学会	40
12・25~27	野尻湖植物グループ	10
11・1・24	近畿植物同好会	30
2・7	関西トンボ談話会	40
2・28	近畿植物同好会	40
3・14	鳥の観察会補助スタッフまとめの会	20
3・21	双翅目談話会	30
3・22	日本直翅類学会	25
3・28	種子植物談話会	20

■実習室 平成10年度 14件

年月日	団 体 名	人数
10・7・26	関西ネイチャークラブの会	10
8・2	鳥類サークル	20
9・13	阪神わかやま野尻湖友の会	20
9・23	阪神わかやまヴィーナスグループ	10
11・21	日本直翅類学会	16
12・6	大阪自然環境保全協会	40
12・25~27	野尻湖花粉グループ	20
11・1・15~17	野尻湖昆虫グループ	20
1・24	野尻湖友の会	20
2・7	野尻湖植物グループ	5
2・11	大阪湾海岸生物研究会	30
2・14	大阪鳥類研究グループ	15
2・28	野尻湖植物グループ	10
3・22	大阪地学教師グループ	20

■講堂 平成10年度 3件

年月日	団 体 名	人数
10・11・22	大阪府高等学校生物教育研究会	150
11・29	レッドデーターブック近畿研究会	100
11・2・7	地球科学講演会	150

VII 施 設

- 所在地 大阪市東住吉区長居公園1番23号
- 敷地面積 6,744.00㎡
- 建築面積 4,392.67㎡
- 延床面積 7,066.01㎡
- 構 造 鉄筋コンクリート造、一部屋根鉄骨造
地下1階、地上3階

■ 主要各室面積・天井の高さ

(展示用施設)	計	2,427.48㎡	(天井の高さ)
オリエンテーション・ホール	550.35㎡	11.00m	
第1展示室	360.55㎡	3.30m	
第2展示室	486.64㎡	7.20m	
第3展示室	403.10㎡	4.70m	
第4展示室	100.00㎡	4.20m	
特別展示室	260.55㎡	4.20m	
2階ギャラリー	266.29㎡	6.80m	
(研究用施設)	計	1,802.82㎡	
館長研究室・暗室	各18.27㎡	2.70m	
動物・昆虫・植物・地史研究室	各47.56㎡	2.40m	
第四紀・外来研究室	各36.54㎡	2.40m	
生物実験室	49.20㎡	2.40m	
化学分析室・くんじょう室	各18.27㎡	2.40m	
電子顕微鏡室	37.43㎡	2.70m	
動物標本製作室	37.71㎡	2.40m	
昆虫・植物標本製作室	各36.54㎡	2.40m	
化石処理室	47.56㎡	2.40m	
石工室	22.21㎡	2.70m	
展示品製作室	28.05㎡	2.70m	
第1収蔵庫	207.09㎡	3.00m	
第2収蔵庫	310.08㎡	3.00m	
第3収蔵庫	207.09㎡	3.00m	
第4収蔵庫	310.08㎡	3.00m	
書 庫	100.30㎡	7.40m	
編集記録室	36.54㎡	2.40m	
(普及教育用施設)	計	604.27㎡	
講堂(映写室・控室含む)	319.09㎡	2.60m	(平均)
普及センター	93.30㎡	2.70m	
集会室	95.12㎡	2.70m	
実習室	96.76㎡	2.70m	
(管理用施設)	計	907.49㎡	
館長室	36.54㎡	2.70m	
副館長室・顧問室	各18.27㎡	2.70m	
事務室	83.34㎡	2.70m	

応接室	29.54㎡	2.70m
宿直室	16.85㎡	2.55m
守衛室	17.64㎡	2.70m
会議室	47.56㎡	2.70m
機械室	472.35㎡	5.85m
電機室	89.92㎡	5.85m
自家発電電気室	49.16㎡	5.85m
中央監視盤室	28.05㎡	2.40m
(共通部分)	計	1,323.95㎡
1階廊下	118.27㎡	2.70m
2階廊下	102.29㎡	2.40m
ロッカールーム	60.59㎡	2.85m
エレベーターホール(荷物用)	123.16㎡	
ファンルーム(南・北側)	各16.80㎡	
荷捌室	161.69㎡	2.70m
玄関ホール	125.10㎡	3.25m
オリエンテーションホール エレベーター	7.00㎡	
倉 庫	106.56㎡	
1階ホール便所	76.26㎡	
2階ホール便所	37.56㎡	
管理棟便所	43.47㎡	
ダクトスペース	102.70㎡	
階 段	179.30㎡	
その他	46.40㎡	
総計	7,066.01㎡	

■ 階数別面積

地階……………855.07㎡	3階……………550.95㎡
1階……………3,178.35㎡	屋階……………76.93㎡
2階……………2,404.71㎡	

■ 各室定員

講 堂……………266人	集会室……………48人
会議室……………22人	実習室……………31人
展示室(1階) 415人	展示室(2階) 400人
地 階……………3人	

■ 工 期 昭和47年1月21日～昭和48年3月31日

■ 総事業費 10億1,000万円

(建設工事費) 7億9,500万円

- ・ 本体工事 (㈱竹中工務店) 4億9,200万円
- ・ 付帯工事 3億300万円

(設計監督委託料) 2,700万円

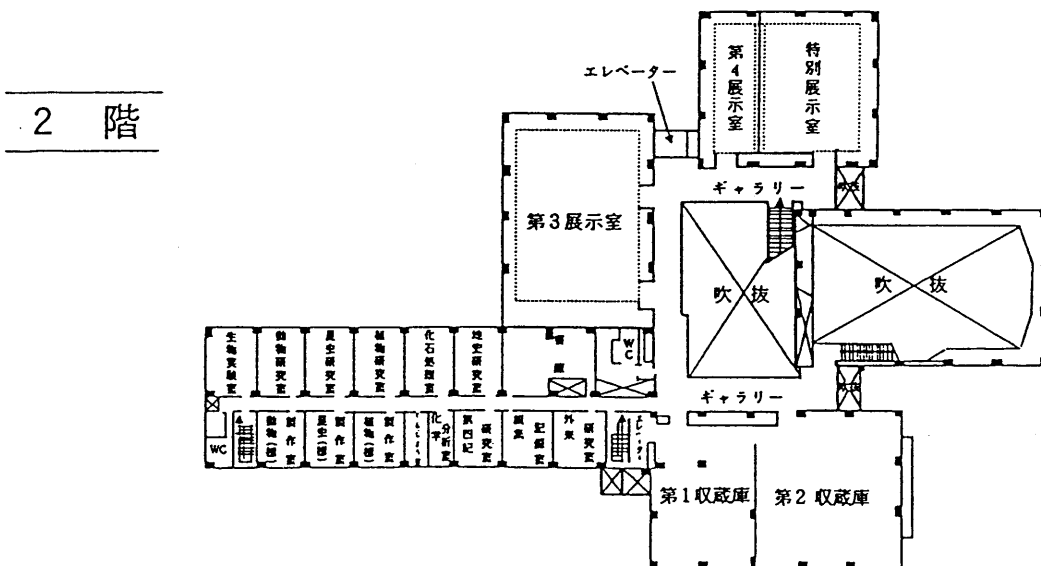
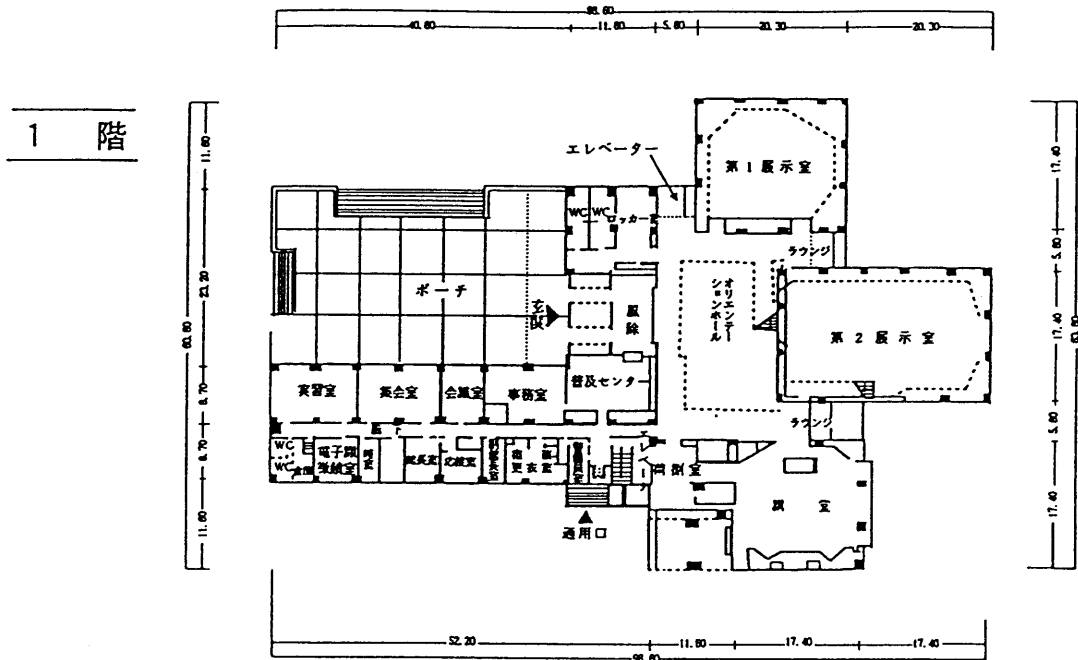
(その他) 3,800万円

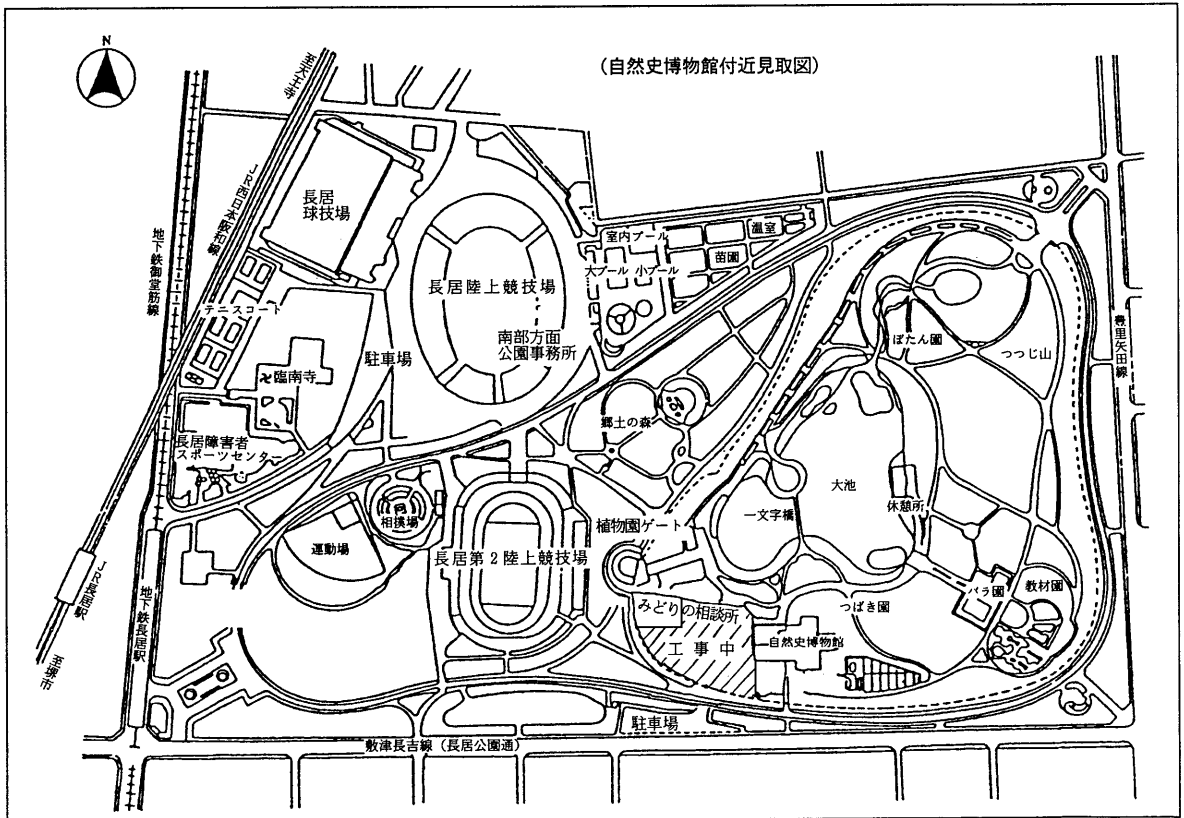
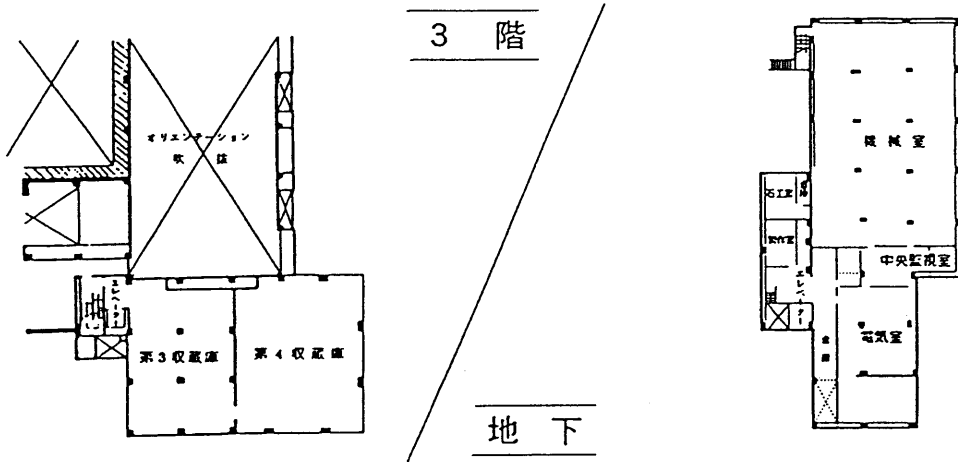
- 事務費、移転費、公園樹木移設工事費
- ネットフェンス設置工事費等

(内部設備費) 1億5,000万円

- ・ 第1展示室ディスプレイ (㈱日展) 2,200万円
- ・ 第2展示室ディスプレイ (㈱乃村工芸社) 2,500万円

- | | |
|---------------------|-------------------------------|
| ・第3展示室ディスプレイ（㈱丹靑社） | ・庁用器具、調査、研究用機器、 |
| 2,100万円 | 資料保管用物品等 |
| ・オリエンテーションホールディスプレイ | 4,400万円 |
| （㈱電電広告） 600万円 | ■ 国庫補助金・起債 |
| ・展示品購入費 3,200万円 | ・国庫補助金 3,000万円（47.10.13付交付決定） |
| | ・起債 3億8,762万円（47.8.25付交付決定） |





○ 大阪市立自然史博物館条例

制 定 昭49. 4. 1 条例39

最近改正 平 7. 3. 16 条例40

大阪市立自然科学博物館条例（昭和32年大阪市条例第38号）を次のように改正する。

大阪市立自然史博物館条例

（設 置）

第1条 大阪市立自然史博物館（以下「博物館」という。）を大阪市東住吉区長居公園に設置する。

（目 的）

第2条 博物館は、自然史に関する科学について、資料を収集し、保管し、展示するとともに、その調査研究及び普及指導を行い、市民の教養文化の向上に寄与することを目的とする。

（事 業）

第3条 博物館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- (1) 実物、標本、模型、文献、図書、図表、写真、フィルム等（以下「博物館資料」という。）の収集、保管、展示及び閲覧
- (2) 自然史に関する科学についての調査研究及び博物館資料の保管、展示等に関する技術的研究
- (3) 展覧会、講習会、実習会、研究集会等の開催及び指導
- (4) 博物館資料に関する同定及び指導
- (5) 博物館資料の貸出及び交換
- (6) 他の博物館、学校、学会その他の関係機関との連絡及び協力
- (7) その他必要な事業

（観覧料）

第4条 博物館の展示場に入場しようとする者は、観覧料を納付しなければならない。ただし、学校教育法（昭和22年法律第26号）第22条第1項に定める小学校就学の始期に達しない者、小学校（これに準ずるものを含む。）の児童及び中学校（これに準ずるものを含む。）の生徒は、この限りでない。

2 観覧料は、1人1回につき、次の範囲内で教育委員会が定める。

区 分	観覧料
高等学校、大学その他教育委員会の定める教育施設に在学する者	200円
その他の者	300円

3 特別の展示をしたときの観覧料は、教育委員会が定める。

（施設の使用及び使用料）

第5条 自然史に関する科学についての講演会、講習会その他に関し、博物館の講堂を使用しようとする者は、教育委員会の許可を受けなければならない。

2 前項に規定する使用の許可を受けた者（以下「使用者」という。）は、1日につき17,000円以内で教育委員会の定める使用料を前納しなければならない。

3 使用者が附属設備を使用しようとするときは、教育委員会が定める使用料を前納しなければならない。

（観覧料等の減免）

第6条 教育委員会が公益上その他必要と認めるときは、観覧料又は使用料を減免することがある。

（観覧料等の還付）

第7条 既納の観覧料又は使用料は還付しない。ただし教育委員会が特別の事由があると認めるときは、その全部又は一部を還付することがある。

（職 員）

第8条 博物館に、館長その他の必要な職員を置く。

（施行の細目）

第9条 この条例の施行について必要な事項は、教育委員会が定める。

附 則〔昭49. 4. 2 施行、告示120〕

この条例の施行期日は、市長が定める。

附 則〔昭51. 4. 1 条例61〕

この条例は、公布の日から施行する。

附 則〔昭55. 11. 27 条例48〕

この条例は、公布の日から施行する。

附 則〔昭56. 4. 1 条例53〕

この条例は、公布の日から施行する。

附 則〔昭61. 4. 1 条例50〕

この条例は、公布の日から施行する。

附 則〔平 4. 4. 1 条例58〕

この条例は、公布の日から施行する。

附 則〔平 7. 3. 16 条例40〕

この条例は、平成7年5月1日から施行する。

○ 大阪市立自然史博物館規則

制 定 昭49.4.26(教)規則12
最近改正 平7.4.1(教)規則18

大阪市立自然科学博物館規則(昭和32年大阪市教育委員会規則第16号)を次のように改正する。

大阪市立自然史博物館規則

(開館時間)

第1条 自然史博物館(以下「博物館」という)の開館時間は、午前9時30分から午後4時30分までとする。ただし、都合により変更することがある。

(休館日)

第2条 博物館の休館日は次のとおりとする。ただし、都合により変更し、又は臨時に休館することがある。

- (1) 月曜日。ただし、その日が国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日(以下「休日」という。)にあたる場合は、その翌日
- (2) 12月28日から翌年1月4日まで
- (3) 館内整理日(毎月の末日。ただし、その日が土曜日、日曜日又は休日にあたる場合は除く。)

(入館の制限)

第3条 次の各号の1に該当する者に対しては、入館を断り、又は退館させることがある。

- (1) 伝染性の病気にかかっている疑いのある者
- (2) 他人に迷惑となる行為をする者
- (3) 資料又は施設を損傷するおそれがある者
- (4) 他人に危害を及ぼし、若しくは他人に迷惑となる物品又は動物を携行する者
- (5) 管理上必要な指示に従わない者
- (6) その他支障があると認める者

(観 覧)

第4条 博物館の展示場に入場しようとする者は、観覧料を納付して観覧券の交付を受けなければならない。

2 観覧券の交付は、閉館時刻の30分前までとする。(観覧料)

第5条 大阪市立自然史博物館条例(昭和49年大阪市区条例第39号。以下「条例」という。)第4条第2項の規定による観覧料は、1人1回につき、次表のとおりとする。

区 分	観覧料
高等学校、高等専門学校及び大学並びにこれに準ずる教育施設に在学する者	200円
その他の者	300円

2 条例第4条第3項の規定による観覧料は、1人1回につき、500円以内でその都度教育長が定める。

(使用の申込み)

第6条 条例第5条第1項の規定によって、講堂の使用許可を受けようとする者は、所定の様式により、申し込まなければならない。

(使用の制限)

第7条 次の各号の1に該当するときは、講堂の使用許可をせず、又は許可を取り消し、若しくは使用を停止することがある。

- (1) 公安又は風俗を乱すおそれがあるとき
- (2) 営利を目的とするとき
- (3) 建物、設備又は展示品を損傷するおそれがあるとき
- (4) 管理上支障があるとき
- (5) その他不適当と認めるとき

(使用料)

第8条 条例第5条第2項及び同条第3項に規定する使用料は、別表のとおりとする。

(観覧料等の減免及び還付)

第9条 観覧料又は使用料の減免及び還付は、教育長が行う。

(資料等の利用)

第10条 資料及び施設の利用については、教育長が定める。

(損害賠償)

第11条 資料又は施設を損傷又は滅失させた者は、教育委員会の指示によりこれを原状に復し、代物を弁償し、又はその損害を賠償しなければならない。

(資料等の寄贈及び寄託)

第12条 博物館に、資料等を寄贈若しくは寄託し、又は寄託物の返還を請求しようとする者は、教育委員会に申し出なければならない。

(寄託資料等の取扱い)

第13条 寄託を受けた資料等は、特別の契約がある場合のほか、本市所有のものと同じ取扱いをする。

(寄託資料等の免責)

第14条 寄託を受けた資料等が、災害その他の不可抗力によって滅失又は損傷した場合、本市は損害賠償の責めを負わない。

(施行の細目)

第15条 この規則の施行について必要な事項は、教育長が定める。

附 則

この規則は、昭和49年4月27日から施行する。

附 則〔昭51.4.1（教）規則15〕

この規則は、公布の日から施行する。

附 則〔昭56.4.1（教）規則17〕

1 この規則は、公布の日から施行する。

2 この規則の施行の際現に大阪市立自然史博物館条例（昭和49年大阪市条例第39号）第5条第1項の許可を受けている者の当該使用許可に係る使用料の額については、この規則による改正後の大阪市立自然史博物館規則第8条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則〔昭61.4.1（教）規則10〕

この規則は、公布の日から施行する。

附 則〔平元.4.1（教）規則9〕

1 この規則は、公布の日から施行する。

2 この規則の施行の際現に大阪市立自然史博物館条例（昭和49年大阪市条例第39号）第5条第1項の許可を受けている者の当該使用許可に係る使用料の額については、この規則による改正後の大阪市立自然史博物館規則第8条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則〔平4.4.1（教）規則24〕

1 この規則は、公布の日から施行する。

2 この規則の施行の際現に大阪市立自然史博物館条例（昭和49年大阪市条例第39号）第5条第1項の許可を受けている者の当該使用許可に係る使用料の額については、この規則による改正後の大阪市立自然史博物館規則第8条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則〔平5.4.1（教）規則3〕

この規則は、公布の日から施行する。

附 則〔平7.4.1（教）規則18〕

この規則は、平成7年5月1日から施行する。

別表

区 分		使 用 料		
		午 前	午 後	全 日
講 堂		7,000円	10,000円	17,000円
附 属 設 備	冷 房 設 備	3,500円	5,000円	8,500円
	暖 房 設 備	3,500円	5,000円	8,500円
	拡 声 装 置	1式 午前・午後各1回につき 1,800円		
	マ イ ク	1本 午前・午後各1回につき 500円		
	ワイヤレスマイク	1本 午前・午後各1回につき 1,100円		
	テープレコーダー	1台 午前・午後各1回につき 900円		
	スライド映写機 （スクリーン付）	1台 午前・午後各1回につき 1,300円		
	16ミリ映写機 （スクリーン付）	1台 午前・午後各1回につき 4,200円		
備	ビ デ オ 装 置	1式 午前・午後各1回につき 2,200円		

備 考

この表中「午前」とは午前9時30分から正午まで、「午後」とは午後1時から午後4時30分まで、「全日」とは午前9時30分から午後4時30分までとする。

○ 大阪市立自然史博物館観覧料等減免要綱

制 定 昭49. 4. 27
最近改正 平11. 4. 1

第1条 この要綱は、大阪市立自然史博物館条例第6条及び大阪市立自然史博物館規則第9条の規定による観覧料等の減免について定めることを目的とする。

第2条 自然史博物館に入場する者が、長居植物園の入場券を呈示したときは、自然史博物館の観覧料から長居植物園の入園料相当額を減額する。

第3条 博物館の入場者が30人以上の団体であるときは次の各号に定める割合の観覧料を減額する。

- (1) 入場者が30人以上50人未満の団体 観覧料の1割
(2) 入場者が50人以上100人未満の団体 観覧料の2割
(3) 入場者が100人以上の団体 観覧料の3割

第4条 保育所、幼稚園、小学校、中学校、盲学校、聾学校又は養護学校の保母又は教職員が、学校行事で園児、児童又は生徒を引率して博物館に入場しようとするときは、当該保母又は教職員の観覧料を免除する。

2 前項の学校長又は施設の長は別紙様式1による大阪市立自然史博物館観覧料減免申請書を観覧する日までに自然史博物館長へ提出しなければならない。

第5条 生活保護法（昭和25年法律第144号）、児童福祉法（昭和22年法律第164号）、身体障害者福祉法（昭和24年法律第283号）、知的障害者福祉法（昭和35年法律第37号）、精神保健福祉法及び精神障害者福祉に関する法律（昭和25年法律第123号）、又は老人福祉法（昭和38年法律第133号）に規定する社会福祉施設の職員が、当該施設の入所者（当該施設に収容された者も含む）を引率して博物館に入場しようとするときは、職員、入所者及び介護者の観覧料を免除する。

2 前項の施設の長は別紙様式1による大阪市立自然史博物館観覧料減免申請書を観覧する日までに自然史博物館長へ提出しなければならない。

3 身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、知的障害者（児）認定カード、療育手帳、被爆者健康手帳及び戦傷者手帳等の所持者及び介護を必要とする者が博物館に入場しようとするときは、所持者及び介護者の観覧料を免除する。

第6条 大阪市内在住の65歳以上の者でツルマークの健康手帳及び本市発行の敬老優待乗車証を所持している者は、観覧料を免除する。

第7条 次の各号の1に該当する要件を満たす場合の団体の使用料を免除する。

- (1) 当館が学術振興又は普及教育に資すると判断して共催する行事
(2) 当館の事業と関連性が強く、また、学術振興に資すると判断される自然史科学に関する各種の学会並びに研究会等
(3) 大阪市立自然史博物館友の会の主催する行事
(4) 博物館法施行規則第1条に基づく博物館実習

2 前項の団体の長は別紙様式2による大阪市立自然史博物館使用料減免申請書を使用する日までに自然史博物館長へ提出しなければならない。

第8条 公益上その他特別の事由があると認めるときは減免する。

附 則

この要綱は、平成11年4月1日から施行する。

様式 1

自然史博物館に団体入館の時に入口で渡す様式。

自然史博物館 使用欄	
決 課 裁 長	主 査 係 員
障害者・中学生以下の学校団体等引率者用	
大阪市立自然史博物館観覧料減免申請書	
平成 年 月 日	
大阪市教育長 様	
申請者 校 園 名 (団体名) 校 園 長 名 所 在 地 電 話	
次の通り観覧料を免除下さるよう申請します。(印不要)	
目 的	
日 時	年 月 日 () 午前・午後 時 分から
引率責任者氏名	
引率者(減免)人数	名
生徒・園児・他人数	名
合計人数	名
申請理由	大阪市立自然史博物館条例第6条及び同規則第9条による。

様式 2

大阪市立自然史博物館使用料減免申請書

平成 年 月 日

大阪市教育委員会教育長 様

申請者 団 体 名
代 表 者 名
住 所
電 話

下記の使用について、その使用料を免除下さるよう申請します。

使用年月日	平成 年 月 日 (曜日)	使用時間	午前 時 分～午後 時 分	参加人員	人
使用目的		種 別			
		数			
		午 前	午 後	全 日	
附 属 設 備	講 堂				
	冷 房 設 備				
	暖 房 設 備				
	拡 声 装 置				
	マ イ ク				
	ワイヤレスマイク				
	ス ラ イ ド 映 写 機				
備	1 6 ミ リ 映 写 機				
	ビ デ オ 装 置				

使用するにあたっては、大阪市立自然史博物館条例及び同規則を厳守し、かつ係員の指示に従い使用中に発生した一切の責任は、当方において負うことを誓約します。

注意事項

使用時間

午前…午前9時30分～正午

午後…午後1時～午後4時30分

全日…午前9時30分～午後4時30分

(準備と後片付けの時間は使用時間に含まれます。)

自然史博物館 使用欄	
決 課 裁 長	主 査 係 員

博物館実習生の受入れに関する運用方針

大阪市立自然史博物館

制定 平成7年2月1日

〈目 的〉

1. この運用方針は、博物館法施行規則第1条の規定に基づく、大学からの博物館実習生受入れについて、一定の規制基準をもうけ、当館の業務に支障のない範囲において受入れることを目的とする。

〈受入れの規制〉

2. 受入れの時期は夏期（7月後半～8月末）または秋期（10月初～11月末）の期間中とし、1人当りの実習日数は5日以内で、当館が指定する。
3. 受入れ人数の総数は、年間20名以内とする。ただし、1大学については5名以内とする。
4. 受講資格は、理科系・文科系を問わないが、大学において生物学または地学関係の教科を履修し（一般教養でも可）、その単位を取得している者に限る。
5. 実習の内容は、当館の概要説明、展示・施設見学、標本・資料の整理、並びに普及行事の補助などとする。

〈受入れの願書〉

6. 博物館実習生受入れの依頼をする大学は、教務係または博物館学の担当教官が、当館での実習を希望する学生を集約した上で、希望する時期および希望者名を記した内諾何文書を、当該年度の4月末までに、当館の博物館実習担当者宛に提出すること。

なお、学生個人からの依頼は受付けない。

〈受入れの諾否〉

7. 当館では上記の依頼について審査し、日程等を決定の上、5月中に諾否を回答する。

〈その他〉

8. 大学において自然史に関係する分野を専攻し、当館においてその関連実技の習得を内容とした実習を受けようとする学生については、当館の当該分野の研究室または学芸員の応諾があれば、上記とは別に受入れることがある。

○ 建物並びに館内展示室の写真撮影等に関する運用方針について

制 定 昭51. 12.

改 正 昭54. 7.

最近改正 昭62. 12.

(目 的)

1. この運用方針は、建物並びに館内展示室の写真・テレビ撮影等（以下撮影等という）について一定の規制基準をもうけ、観覧者の利便と展示資料の損傷防止をはかることを目的とする。

(撮影等の規制)

2. 個人使用を目的とした撮影等は、入館入館者のさまたげにならず、かつ、建物・展示資料の損傷にならない限り規制しない。
3. 純然たる商業目的で撮影等をする場合は禁止する。ただし、当館の社会教育施設としての普及、宣伝に十分効果があると認められる場合はこの限りでない。

(撮影等の許可願)

4. 前項ただし書き、ならびに大型機材等（照明装置、テレビカメラ等）を使用する場合は、別紙様式により届出、許可を受けなければならない。

(許可条件)

5. 前項により許可を受けた者は、次の条件を遵守しなければならない。

- (1) 入館、入館者のさまたげにならず、かつ、建物、展示資料を損傷させないこと。
- (2) 撮影した写真等の使用は、今回の許可願の事項に限ること。
- (3) 撮影した写真等の使用にあたっては、必ず当館の館名を明示するとともに、当館の利用案内をすること。
- (4) 写真掲載紙等は、当館に1部提出すること。
- (5) その他詳細については、当館と打ち合せすること。

(その他)

6. 当館が提供する資料等の使用についても、この方針を適用する。

決裁	庶務課長	主 査	係 員
年			
月	学芸課長	主任学芸員	学芸員
日			

<p align="center">写真・テレビ撮影等許可願</p> <p align="right">平成 年 月 日</p> <p>大阪市立自然史博物館長様</p> <p>所 在 地 会社・団体名 代表者氏名印 (担 当 者:) (電話番号:)</p> <p align="center">次のとおり、写真・テレビ撮影等を許可くださ るようお願いします。</p>	
日	時 平成 年 月 日() 時 分～ 時 分
目 的	
撮影場所・資料等	
人数・使用機材	
(テレビの場合) 放 映 日 時 番 組 名 タ イ ト ル (写真の場合) 掲 載 誌 名 記事タイトル 著 者 名 発 行 者 名 発行年月日	

<p align="center">写真・テレビ撮影等許可願</p> <p align="right">平成 年 月 日</p> <p align="right">様</p> <p align="right">大阪市立自然史博物館 館 長</p> <p align="center">平成 年 月 日付で申請のあった「写真・テレ ビ撮影等許可願」について次のとおり許可します。</p>	
日	時 平成 年 月 日() 時 分～ 時 分
目 的	
撮影場所・資料等	
人数・使用機材	
(許可条件) (1) 入館・入館者のさまたげにならず、かつ、建物・展 示資料を損傷させないこと。 (2) 撮影した写真等の使用は、今回の許可願の事項に限 ること。 (3) 撮影した写真等の使用にあたっては、必ず当館の館 名を明示することとともに、当館の利用案内をすること。 (4) 写真掲載紙等は、当館に1部提出すること。 (5) その他詳細については、当館と打ち合せすること。	

ANNUAL REPORT

of the

Osaka Museum of Natural History

for the fiscal year of 1998

Nagai Park, Higashi-sumiyoshi-ku, Osaka, 546-0034 Japan

Issued : September 30, 1999